
シュガー・プリンス

花戸 紗世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シュガー・プリンス

【Nコード】

N1496L

【作者名】

花戸 紗世

【あらすじ】

私立月岡高校に通う高校一年の柏木美妃。かしわぎはるひある日ひょんなことから超少数精鋭派の生徒会会員になることに！？

しかしその生徒会は学園が誇る別名アイドル部というイケメン揃いの会だった！！

男嫌いで女にモテる美妃の、ぶつとび学園Loveストーリーです

Sugar love 1

「……………はい？」

瑠璃花に無理矢理、引つ張られ着いた先は体育館裏の知る人ぞ知る告白スポット。

そこでなぜか、明らかに瑠璃花に告白しようとしてここへ来たメガネの青年と向き合っていた。

「だーから、ウチは彼氏いるんやって。ホラ、見てみいこのイケメン。ごめんなー、あきらめて？」

フニヤツと微笑んで腕を絡めてくる瑠璃花をみながら、美妃は薄笑いを浮かべた。

あーなるほどね。はいはい。あんたの彼氏役すんのは慣れてますよー。

そんな表情をする美妃に相手のメガネが苛立つて（？）泣き始めた。「るっ瑠璃花さん…ヒドイっ……………僕は遊ばれてたんですね……………」

え、そっち系？と以外な彼氏の反応にポカンとする美妃にはお構い無しで瑠璃花はポンとメガネの肩を叩いた。

「ごめんなー。でもアンタの事は後五ヶ月は忘れへんと思うから。さっさとウチの事忘れて、いい恋みつけえや。…ほな、さいなら」

ええっ、軽っ！

親友の性格を知ってはいたが、まあ…。どこのホストだ。

「ほら、行くでハルヒ」……怖い女だね、瑠璃花。良いのはなに？顔だけってやつ？」

スタスタと荷物を取りに教室へ帰りながらしみじみ美妃が呟くと、瑠璃花は不敵な笑みで鼻を鳴らした。

「人の事いえんのお？ハルヒやて、月イチで告ってくる可愛らし子羊（九割強が女）片っ端からフツとるやん。まあ、お互い、…瑠璃の花…だの…美しい妃…だのが超びったりの美人やし、雑魚が群がるのも当然やしな。…アンタの場合、女にばっかで、ビミョーかも

しれへんけど」「よけーなお世話です。そうだ雪姫ゆきに呼ばれてんだ。行かなきゃ。瑠璃花もくる?」

鞆に荷物を詰めながら尋ねると、瑠璃花はただでさえ細く華奢な身体を縮ませた。

「あかんあかん。ウチあのひと苦手やねん。どーもウチ、美人のナルシがあかんねんなー」。バイトも入つとるし。ごめんな、ハルヒ」

…同族嫌悪ってやつかな、と美妃は可笑しそうにクスクス笑った。

「わかった。じゃ、また明日ね」

「ん。お姉さんによろしゅう言つとつて」

Sugar love 2

「説明して？雪姫」

つい15分前、最上階にある生徒会室へと急いで向かっていた美妃は、向こうから、タワーのように積み上げられた教材が歩いて…？いや、視界が見えなくなるほど教材をもって歩いてくる女ひとを発見し、慌てて駆け寄った。

「大丈夫ですか！？半分持ちますよ、貸してください」

「あ…すまん」

軽々とほとんどの教本を持ち上げた美妃は、反射でにつこり笑った。見かけない顔だが、新任の教師らしい。お局教師の嫌がらせでこんなもの、運んでいたのだろうか。

「いえ。貴女みたいな可愛らしい人に、こんな荷物を持たせておくわけにはいきませんから。どこへ運べばいいんですか？」

「…なるほど、凄才だな、さすが柏木美妃」「へ？…えっと」戸惑って固まった美妃に、目の前の優しげでどこか神秘的な女性教師は美妃を見上げながらうんうんと頷いた。

「これなら、ウチで働いてもらっても大丈夫そうだ。…ま、とりあえずソレ、生徒会室によろしく。行くぞ」

そういうと、教師は美妃に背を向け、もと来た道をずんずん歩いていった。

それから15分後。

「…は？いまなんて？」美妃は目の前で優雅に紅茶を呑む姉をポカンと見詰めた。

「だから、私、イギリス留学するから」

「そのもつと後」

「えー、だから、その間私の代わりよろしく。簡単よ？生徒会のマネージャー」

生徒会にマネージャーってなに。

混乱する美妃の口にチヨコレートを放り込んだ雪姫は、スクツと立ち上がった。

「じゃ、行ってきます。後のことは頼んだわよ、美妃。分からないことは、自力で調べるか、翔太とか香坂先生とかに訊きなさい。じやね」

えっ、ちょっと待って。声にならない叫びを胸に抱えてながら本当に部屋から出ていった姉の姿を見送る。

「おい連れてきたぞ」って雪姫、もう行ったのか」

香坂の声に、姉が出ていったのとは別のドアの方に視線を動かす。

「ハルヒ、こいつが月岡高校の生徒会長だ」

「…はあ」美妃は眉間にしわを寄せ、いやいや立ち上がった。だが一応、綺麗にっこり笑う。

「柏木です…どうぞよろしく」

姉には逆らえない。

そんな美妃の心情を読み取ったのか、香坂の隣に立っていたサラサラした茶髪の華やかな容姿の青年が驚いたように目を見開いた。

「はー、雪姫の妹、めっちゃ美少女だけど男嫌いって本当だったんだ。えっと、ハルヒちゃん？俺、生徒会長の翔太。今高三やつてます、これからよろしく」ペコリと頭を下げる翔太に、慌てて美妃も頭を下げた。

「よろしくお願いします。…ところで、今日は他の方は」

そう美妃が尋ねると、香坂と翔太は顔を見合わせた。

「まあ、まだ入学したてだからな…。知らなくても無理はない」

「いやいや雪姫の妹なんでしょ、ハルヒちゃん。ってか一年のころ、かなりもうファンになってくれますよ？」

「…えっと、あの？」

美妃が恐る恐る口をはさむと、はっとしたように翔太が振り返った。
「あー、じゃ、いく？のほうが早くね？」

Sugar love 3

「大丈夫かしら…、ハルヒ。まあ、あのコほど適任なのは、他には居ないってわかってるんだけど…」

空港へ向かう車の中で大好きなチョコレートをモグモグしながら雪姫はため息まじりに携帯に話しかけた。

『うーん、どうだろね』

「…軽いわね。私がこんなに心痛めてるってのに。聞いてんの翔」

不満全開な雪姫の声に、翔太は苦笑した。

『きーてますよ。大丈夫だよ。ハルヒちゃん、めっちゃ格好いいし。あ、それにウチに預けといたほうが変な虫つかなくて、雪姫も安心だろ?』

「…まーね。あ、そろそろ空港着くわ。じゃあね翔。また明日、連絡してね」

『了解』

プツツと切れた携帯をたたみ、翔太はクスクス笑った。

「ワガママな姫だよな、本当に。勝手だし…」

「翔太さん? どうしたんですか」

いつの間にか、生徒会特別ステージを見終わったボロボロの美妃が駆け寄って来ていた。

「あ、雪姫、空港着いたって。…どうだった?」「…ウチの学校、大丈夫ですか。って言うか私、全然知らなかったですよ……アイドル…部?」

微妙な顔で薄く笑う美妃に、思わず翔太は吹き出した。

「あははっ。似てねー」「…よく言われます」

自分でも、生徒会をあそこまで大改造した姉と血が繋がっているこ

とに今更ながら驚く。

似ているのは姉の自慢でもある（あの人は全てが自慢だが）艶々した黒髪ぐらいだろう。美妃はベリーショートにしているが、それはさておき。

「雪姫が、作ったんですよね…アレ」

美妃は、恐々と黄色い声を上げている集団を指差した。

笑顔を振り撒く三人の（いずれも超美形）青年たちをぎゅうぎゅう囲むようにしている。

「きゃー！^{なつめ}素君の今日のご衣装、凄く素敵でしたわー！」

「あ、ちよつと退きなさいっ！^{あきの}秋野先輩がみえないでしょ！」「あの…コレ作ったんです、食べてくださいっ」そんな戦場で一人の女子生徒が勢いよく差し出した包みを、目鼻立ちがくつきりとした、三人の中でも特に色気のある顔立ちの青年がやんわりと押し留めた。「ごめん、こういうのは規則でダメだから。気持ちだけでもらつとくね」

「あ、すみませんでした…」

その娘は一瞬、うつむいたが、すぐに満開の笑みを見せた。

「…うーん、やっぱり^{れお}玲生はすごいな。全然相手を不快にさせてない。あ、あの今、プレゼント断ったのが玲生で、うちのNo.1」

しみじみと語る翔太に、美妃は諦め顔で訊いた。「No.1とか、あるんですかー。はー。…って言うか生徒会ってこんな人数だけ？少なくともですか？」

翔太は不敵な笑みを浮かべた。まるで女の子のように華やかな顔が輝く。「ウチは少数精鋭派だからね。あ、コレも雪姫が決めたんだけど」

「なんでそんな」

「アイドルって数がいれば良いわけでもないじゃん？管理も大変だし。って雪姫が。まあ実際、成績優秀者しかウチにはいれないから、仕事に支障はないからさ、いっかなーって」

「…ずいぶんアバウトですね、基準は？」

「各学年10位以内でかつ、雪姫…いや、マネージャーと会長の面接試験に合格すること、かな。ハルヒちゃんは余裕で合格だね。学年2位…だっけ」

「…男じゃないですけど」

そう小さく反撃すると、翔太はポケットから出したメモ帳をペラペラめくった。

「えー、中学から今まで月イチで告られてるよね、90%女の子でも、ちゃんと面と向かった告白じゃないのも含めたら…月ゴ？告られてはっかだね、モテるー」美妃は焦った。

「なんですかそのメモ帳。誰から…って雪姫…」ガックリうなだれる美妃に、翔太は心から同情した。

「はい、正解です…」

可哀想にハルヒちゃん…。雪姫の笑いが目に浮かぶ。

Sugar love 4

「…まあ…きて！全員紹介するよ」

そう翔太に言われ、美妃は翔太と生徒会室に向かっていた。放課後で、生徒会特別ステージも終わったため、ほとんど生徒は残っていない。

「基本、仕事は放課後するんだよね、残れる？」

「あ、はい。特に用事ないです」

「よかった。あ、瑠璃花ちゃんと中学も同じの親友だったっけ？」

「え…はい、まあ」

翔太は可笑しそうにクスクス笑った。

「今日のステージ、一年で来なかったの瑠璃花ちゃんだけ。なんで来なかったのかな」

これには驚いた。

「え、そんなに有名なんですか、生徒会って」

別名アイドル部って言うのも、伊達じゃなかったらしい。

感心する美妃に、翔太は目を丸くしてツツコンできた。

「そっちかよ！」

「あ、いえ多分瑠璃花は」

美人のナルシ…。

「ん？なに？」

「いえなんでも…ぎゃ」突然、すぐ隣の教室から男のひとが出てきた。

なんだか熱い視線を翔太に送っている。

「あ、なんだかえで楓か」

そついうと普通に歩き去ろうとする翔太に楓は逃がすまいと追いつた。

「待ってください！」

そついうと楓は翔太を逃がすまいと抱きついた。

「！……そういう？」

美妃は固まった。初めて見た。

翔太はブンブンと手を振った。

「いやいや誤解だつて。こいつは」

翔太の言葉が言い終わる前に、楓はガバッと涙でぐしゃぐしゃの顔を上げた。

「翔太先輩！なんで僕じゃないんですか！？…僕は女の子に負けたんですか…？」

やっぱそういう関係？

「いや、ハルヒちゃんにその顔。…楓、どけ。うざい」

Sugar loves

なおもギャーギャー騒ぐ楓と2mほど距離をおかれた美妃を引き連れ、翔太は生徒会の扉を開けた。元音楽室だった為、かなり広い部屋だ。

「翔太先輩っ…俺じゃだめですかっ？」

「……あ、ハルヒちゃん、そのソファにでも座っというて。……楓、茶」

嬉しそうに炊事場にむかう楓を完璧に無視し、美妃に向き合う。軽く微笑む。

「さっき連絡あったから、みんなすぐ来ると思うよ」

「あっ…はい。……」

「……………えっと、楓はね、ウチの生徒会に入りたい人でね」

「あ…。なるほど…？」少し首を傾げる美妃に翔太は苦笑した。元々女の子のように甘い顔がフニヤツとなる。

「なんで疑問系ー？やだなー…」

そういうと楓の持ってきた紅茶をすすり、一瞬はつとした表情になり、すぐに悲しそうな笑みを浮かべた。

美妃の視線に気づいて、翔太は微笑む。

「どうした？」

「…いえ、翔太さん、初孫抱いたときのおじいちゃんみたいな顔になってましたよ」

真顔で言う美妃に翔太は驚いたような顔になった。

「ひでー。って言うかよかった、ハルヒちゃん、雪姫がいうにはめちゃくちゃ男嫌いで、僕と話してくれるか心配だったんだよね。以外と面白いじゃん、ハルヒちゃん」

翔太の言葉に、美妃は頷いた。

「自分でも、兄以外の男の人にこんなに喋れて驚いてるんです。多分、翔太さんは…顔ですね」

「……ほお」「女の子みたいな顔なんで…。そんなに背も高くないですし」

「……一応１７１はあるよ。って言うか雪姫とかハルヒちゃんが高すぎんだよ！なんセンチ？１７０ある？」

必死な翔太の形相に美妃は固まった。

「ええっとー。雪姫は多分１６５で…私は１７０とか…？」

ぐはっと頭を抱える翔太に、お盆を抱えた楓が嬉しそうに呟く。

「俺、１７３です！」

「黙っとけよ楓？…はあ。ま、いーや雪姫には勝ててるし…っってお前らいつの間に」

Sugar love 6

「さつきからおったでボケ。…初めましてー。高三で副会長で瑠璃花の兄の東条棗とうじょうなづめですう」

ニツと口の端を上げて笑う棗に、美妃は驚きを隠せなかった。

…瑠璃花から兄がいるとは聞いていたが…。初めて見た。

確かに、雰囲気や話し方がソックリだ。

顔の造りはあまり似ていないが。この部の中でも一番男っぽい容姿をしていてかつ、人なつっこそうな印象を与える。

「よろしく願います」

深々と頭を下げた美妃に、翔太は少し苦笑した。誰も気付かなかったが。

「じゃ、次俺ね。白鳥玲生おしろつねい、妹ちゃんとはタメだからハルヒって呼んでい？」

「え、同い年なんですか？」

それにしても覚えがない。心底驚いた顔の美妃に、玲生は吹き出し、生徒手帳を取り出した。

「ほら、高一。」

…俺のほうでは有名だったんだけど、ハルヒ。雪姫さんの妹で、男嫌い…ってか男に興味なくって、女にモテるって。ねえ翔さん」

自分の評価に今更ながら啞然とする美妃に追い討ちをかけるように翔太が口を開いた。

「ああ。玲生の事知らなかったのも驚きだけど、玲生とはるぐらい女の子にモテてたのは、正直仰天した」

「え、えー、まさか」

美妃の小さな反論は意味をなさず、棗も笑いながら語った。

「三年も流石雪姫さんの妹つてのもあったけど、めっちゃ人気やったもんなあハルヒちゃん」

楓までもが口をはさんできた。

「二年もツスよ。超有名、ハルヒさん」美妃は泣きたくなくなる気持ちを押さえながら、これだけは言った。

「楓さん…。私後輩ですし、呼び捨てでお願いします」

楓はブンブンと頭を横に振った。

「いいえ、雪姫さんの妹を呼び捨てなんてしたら殺されるツス…色んな人に」

そんなに怖いのかと同情していると、突然、一番端っこにいた人がフラツとして倒れた。

「……大丈夫ですか？」

反射的に、間一髪のところでお姫様抱っこしてしまった。

安堵の表情を見せる美妃の顔を、その人はジーッと覗き込んだ。

「重くない？俺」

「あ、いえ別に」

「力持ちだねー」ストツと立ち上がったその人はペコツと軽くお辞儀した。

「ありがと」

「…ってそれだけかい！はよう自己紹介しいや。お前に関しての説明どころは必要以上にあんねん」

棗に急かされ、その人は無表情のまま、少し考える仕草をした。まるで人形のように整っていて、品のある容姿だ。

「…名前は秋野…理桜^{りあう}」

「うん。秋と桜っていうな。コスモスかつちゅうねん」

「…高二で、特技は…霊視？」

美妃はまた固まった。

「…は？」

「霊とか見えます話せます…あ、俺、昼間は元気なくってすぐ倒れ

るんでよろしく」

美妃は笑顔のまま完全に硬直した。プルプルと握った拳が震える。

「……。…マジで」

雪姫のバカー！！

S u g a r l o v e 7

瑠璃花はバイトの休憩時間に、バイト先のケーキ屋、家^{けえき}絵貴の店長子息でありバイトの先輩でもある、朝田^{あさだ}翔太とお茶を飲んでいた。

「で、ハルヒ逃げたん？どうなった？」

相変わらず情報の早い瑠璃花に翔太は苦笑した。

「皆必死に引き留めてたよ。ハルヒちゃんのせいで部員になれなかったと思ひ込んでた楓まで。みんな、嬉しかったんだろうね。新鮮だし」

「…まあな。ハルヒはどんなにイケメンでも不細工でも扱い一緒やからな…多分志貴さんのせいやと思うけど」

あー、と志貴の顔を思い出して翔太は唸った。

「あはは。さすが雪姫の双子の弟だね。やることぶつ飛んでるって言うか、変人？」

「…ま、アンタも人の事言えんけどな」

翔太は盛大に笑った。

瑠璃花は少し驚いた。雪姫が居なくなっただけというもの、そんな屈託のない笑い声は初めてだ。茶髪をかきあげ、翔太は微笑んだ。

「そうかな。別に法律に触れてるわけでも無いのにねー」

「…ま、いいけどな」

Sugar love 8

美妃は、無意識に全速力で生徒会室を飛び出していた。

あんだけ男ばっかの集団は無理だ。たとえ世間的には超絶美しい顔でも…お化けは無理。って言うか男ばっかは嫌。

「待ちいな、ハルヒちゃん！」

後ろから棗の声が聞こえた。

…すみません、ちょっと今回はっ無理です！普通に女の子拾ってきただうがいいっですって絶対。女の子もめちゃくちゃ喜ぶと思います。私はやけど。

無我夢中で走っていた美妃だが、甘かった。

「ふーん。逃げるんだ」

「…りっ理桜先輩…」

息を切らす美妃の行く手を通せんぼするように立ち塞がった理桜が、気味が悪いほどの最高級スマイルを浮かべて、美妃の頭にポンと手をおいた。さっきは気付かなかったが、以外と背が高い。

「…ん、俺、霊みえるって言ったじゃん」

「……はあ」

「逃げんのは勝手だけどさ、俺そーいうの嫌い」

「……そうですか」

「……で、逃げるんなら俺イヤガラセしてもいい？」

無表情で首を傾げて尋ねてくる。

「……は！？」

なんだか凄く嫌な予感がする。

「してもいい？」

逃げたくても頭を押さえられてて動けない。

…なにこれ、金縛り？

なおも無表情でジーっと見詰めてくる理桜に

あー、理桜先輩の目、ちょっと紫色だー。

現実逃避をしてしまう。

「いー？」

「……すいませんでした………（泣）」

Sugar love

「おー、早かったな理桜」

玲生はぐったりした美妃と妙にイキイキとした理桜をみて破顔した。

「随分ハルヒを気に入ったみたいだな、理桜が他人にあれだけ興味を示すのもめずらしくないですか？ 棗さん」

棗も煎餅をかじりながらうんうん頷いた。

棗たちもさつき一応美妃を追ったのだが、理桜がぼてぼてと何処かへいくのを見て、先に生徒会室に帰ってきていたのだ。…美妃の足に追いつける自信が無かった、という理由もあるが。

「せやな。俺らもハルヒちゃんマネージャーで嬉しいし。最高の人選やで雪姫さん。流石やなあ」

翔太は微笑んだ。

これなら大丈夫だろう。

「うん、よかったよかった。……さて、ハルヒちゃん。お仕事♪」

弱々しく顔を上げた美妃に、翔太はにっこり笑った。

S u g a r L o v e 1 0

星降る夜……。

そんな抽象的でよくある表現を使いたくないが、本当に、そんな空だった。

その時は、星を見る余裕なんて無かったけれど。

「……………は？」

「だーから。生徒会長、なつてよ」

白い息をはきながら、学校でなにかと有名なその美女はさっきも言った台詞を繰り返した。

「いえ、結構です」

学校からの帰り道、彼女はいきなり現れ、俺にずっとつきまとっていた。俺と同年のはずだし、初対面だと思うが、随分親しげに話しかけてきた。

「どうして？」

彼女は心底意外そうに首を傾げ、眉間にしわを寄せる。

俺は息を吐いた。

「だって……面倒じゃないですか。だいたいどうして俺なんです？成績はかなり良いと思いますけど、生徒会長がタバコ吸ってたり酒呑んでたらダメでしょう」

一気にまくし立てる。

別に嘘じゃないし。

これで、諦めるだろう。

早く、帰ってこないだろうか。

「ん？別に問題ないわ」

飄々とした表情をする彼女に正直苛々した。

「……何故。なにが目的ですか？」

きつと返ってくる答えは平凡なものだろう。いつもそうだ。

正直、このテの勧誘はよくある。

まだ高校入って1ヶ月と経たないが、すでに軽音楽やら文芸部など、手の指では足りないくらい、こういう事があつた。しかも全部女子。今回も、そう変わらないだろう。それに、と俺は言う。

「たしか柏木さん、俺と同じ一年でしょ。なんでそんな権限あるんですか、おかしくない？」

「……別に。それより、なぜ貴方を選んだか、知りたいかしら？……でもその前に」

愛想笑いを引つ込めた彼女は、急に強い眼光で視線を合わせてきた。

彼女がふ……と笑い、俺がその美しすぎる表情に思わず見とれてしまった、その時。

一瞬で間合いを詰めた彼女に……。

「グッハ……。ゲホッ……………」

思いっきり、殴られた（グーで、顔を）。

「…貴方を選んだのは顔よ？ソレ以外なんの取り柄があるの？ま、いま傷つけちゃったから、もう要らないと思うけど」

「……………」

何をされ、言われたのか分からず、自分でも驚くぐらい呆然と相手を見ていると、彼女は一瞬心配そうな表情を浮かべた。

そのまま急いで携帯を取り出し、彼女は電話をかけ、相手と話し始めた。

「ええ、ごめんなさい志貴、あの人殴っちゃった。……うん、だって死ぬほどナルシストだし、人の事馬鹿にしてるし、むかつく…あ、別に大丈夫？よかった、って言うかももう志貴が会長になったらいいのに、あ、うんもう帰ります。…バイバイ」

幸せそうな顔で携帯を切ったと思うと、本当にさつさと帰っていつてしまった。

俺のほうには、生ゴミでも見るような顔を向けただけ

……その時は彼女の背中をみているだけしか出来なかった。

でもすぐ、追いかけた。

びっくりするほど、遙か遠くにいた、彼女を。

「ね、俺かなり頑張ったと思わない？」

クスクス笑いながらのろけてくる翔太に、棗はため息をついた。

「なー…、何回聞かせんねん。久しぶりにウチ来たと思ったたら…
…そりゃ、お前の努力はありえへんやけどな。煙草も酒もやめたし」

翔太は不敵に笑った。

「そんなの小さい小さい。それより土下座して会長にさせてもらってからのが大変だったなー」

名前覚えてもらって嬉しくて、誉められると嬉しくて。

雷が嫌いっていう、以外な可愛さを見つけたり。山のように積みあがった仕事は、雪姫が側に居るだけですぐ終わったし。

「翔？いい名前ね………って！やっとな笑ってくれてさあ、滅茶苦茶可愛いんだよねーうふふ」

不気味なほどの笑みでクスクスわらう親友に、棗は引いた。それはもうのけ反るほど。

うふふ…って…。

瑠璃花居なくてよかった。

「お前…。いや、いつそのこと感服するわ。ってかお前が一番恐い。何回きーてもそー思う。だってそんな…なあ」

「うつせ。お前にはわかんねーよ」

「いや、わからんやろ。そな設定。…でもよかったわ。瑠璃花をこ

んな意味わからん男にやるやんで絶対いやや」

翔太は飲んでた烏龍茶を吹いた。
そのまま爆笑する。

「はあ！？瑠璃花が俺の事好きなわけないだろ。美形のナルシだし、幼なじみだぞ」

…誰のお陰で美形のナルシが嫌いになったか本気でしらんねんなー。
結果オーライやけど。

とりあえず、笑う。

昔はどうしても、瑠璃花は今、全くそういう感情を翔太に持っていない。見事なほどに。というか、もってたら兄として困る。

「そやなーってか、例えばやんか。志貴さんの気持ちになってみたかっただけやし」

「…あー…、雪姫、いま志貴さんと一緒に住んでんだよなー…」

急にテンション低くなった翔太を、棗は慌てて励ました。

「だっ、大丈夫やって！お前、今は誰よりもお前が雪姫さんの近くにいるやん…あっ！まさか自分もイギリス留学しよーとか間違っと思ってうなや！ハルヒちゃんどーすんねん。ってか俺らどうすんねん、わかつとるかー、自分。流されんなや」

翔太は苦笑いした。

昔と変わらず真剣に翔太とむきあってくれる棗は、やはり親友だった。

「ああ。そんなことしたら雪姫に殺される。俺、ハルヒちゃんも心配だよ」

「…うーんそうか？雪姫さんの後やから、皆随分明るくなったし余裕も出てきたやん。ハルヒちゃんもいい娘やし。…あ、理桜めつちやなついとつたな、雪姫さんよりハルヒちゃんのほうが気に入ったみたいやった。玲生も」

翔太は頷いた。

「ま、実際雪姫は重しみたいなものだったからな。少しでも自分の意思で生徒会にいてくれるようにならないと。ただでさえ人手がギリギリなのに、理桜とかフラフラーってどっか行っちゃうし、玲生は仕事あるからあんまし生徒会こねーし」

はあーとため息をつく翔太に、棗は以前から思っていた疑問を訊いてみることにした。

「なあ、なんで楓、正式に生徒会いれへんの？雑用はさせてんのに俺この前泣きつかれてんで。まあ、そんな綺麗な顔しとるわけじゃないし、女子にもあんまモテとらん、総合的に中途半端…あ、それ理由？」

納得した顔で尋ねてくる棗に、志貴はにっこり笑った。

「うん。そうだよ」

「うわ嘘やん。えー、教えてくれへんの？ひつどいなー自分」

「うるさいな、今月仕事増やすよ」

「あ、はぁーい。もういいです」

翔太はすつくと立ち上がった。

「あれ、もう帰るん？」

「ああ。邪魔したな。雪姫に電話かけないといけないから帰る。また明日」

「おー、じゃな」

S u g a r L o v e 1 0 (後書き)

花戸です。

何だか、番外編っぽくなってしまいました…。

これからも、ちよつとずつ入れていけたらいいなーと思ってます
(笑)

今後も作品をよろしく願います。

Sugar Love 11

「…瑠璃花！。知ってた？」

中庭のベンチで、パンをかじりながら独り言のように呟くと、瑠璃花は少し瞬きした。

「何を？雪姫さんが生徒会マネージャーで、イギリス留学するからアンタを後がまにつちゅーこと？あ、そもそも生徒会『アイドル部？』うちの兄貴が副会長？それとも」

「あー、も、いいよ。はい、知らなかったの私だけです。常識知らないヒトでごめんなさい」

あはは。と薄く笑う美妃に、瑠璃花は固まった。昨日一日で人格変わったこの娘。

「ま…、いいやん過ぎたことは」

「よくないもん。知ってたら行かなかったもん」

プイツと顔をそむける美妃に瑠璃花はそうやな…、としか言えなかった。

美妃は高校入学するまではイギリスに兄と住んでいて、雪姫と入れ替わるような形の入学なので、学園の色々を知らないのも…まあ分かる。

多分、雪姫や叔母である学園長はわざと美妃に教えなかったのだろ

う。

瑠璃花は軽いため息をつき、美妃の頬をつねった。

「いたっ…、にやにすんの瑠璃花」

「いつまでもうじうじと。可愛いないなあ」

大きなお世話だ。

口をへの字に曲げる美妃に、瑠璃花はそういえば、と美妃の膝の上に置いてある冊子をとった。

「なにこれ？…あー、なるほどな。今年はコレか。…初シゴト？」

「副会長の妹って情報早いねー…。なに、エスパー？」

「アンタみたいな超能力はないからな。学年一位も凡人やと思うで」

その学年首位も、美妃がわざと手を抜かずに本気を出せば、かつさらうのも簡単なことなのだろうが…。

情報が早いのは単に昨日翔太が棗と話していたから知っただけ。

そうとは知らない美妃は自分だけ置いていかれている気がしてため息まじりにパンをかじる。

「生徒会が主催する歓迎パーティー…。新入生とか新任の先生とかを対象としてて舞台とかするんだって」

「普通の生徒は見られへんかったっけ」

「いや。入場券を買ってもらうことになるらしい。でも関係者はタダじゃないか？」

「うんそうそう…。ん？」

突然聞こえた声に、美妃と瑠璃花は同時に後ろを振り返る。声の主をみて、美妃は驚いたがなんとか微笑む。

「あ、…えつと、白鳥君？だよね」

瑠璃花は訝しげに眉を潜めた。

白鳥玲生が、なぜこんなところに。

身構える瑠璃花に軽く会釈した玲生は美妃を見て、花開くような笑みを見せた。

「やだな。玲生でいいよ、ハルヒ」

「…人の彼氏、馴れ馴れしく名前ではばんといて？白鳥玲生君」

瑠璃花は男専用の魅惑の笑み（これをやられてオチなかった男はいない）を見せているが明らかな嫌悪感をむき出した。

微かな笑みを残した玲生は瑠璃花を自然に無視し、美妃に向き合った。

「翔太さんと棗さんが呼んでたよ。そのパーティーについてだって生徒会室で」

瑠璃花の険しい雰囲気になく気付かなかった美妃は慌てて立ち上がった。

「うつ…一応台本は作ったんだけど…。ごめん瑠璃花、行ってくるね」

「ああ…気いつけーや。パン、教室もってつとくから貸し」

瑠璃花に食べかけのパンを手渡した美妃は全速力で走った。
見えなくなるのを確認してから、玲生はストンと瑠璃花の隣に腰を下ろした。

「頑張るね、ハルヒ。嫌がっていたからすぐにやめると思ったのに。
あーあ」

瑠璃花はやつとの事で嘲るような笑声をあげた。

「ははっ。ホンマにいつまでたっても馬鹿やなあアンタ。…なめんなや？ハルヒ。あの娘はアンタに負けるような女やない。アホな事はするだけ無駄やで」

「…ふーん？強気だな。お前の方はどうなの？瑠璃花サン」

瞳を細める玲生に瑠璃花は軽く首を傾げ微笑んだ、が。身体が細かく震える。恐い。
ダメだ。

「…は？何が。…ごめんなー、意味わからん」

言いながらベンチから立ち上がり、教室に戻ろうとした瑠璃花の腕を、玲生が掴んで引つ張った。

「…なっ。やめっ！」

必死に抵抗する瑠璃花をベンチに押し倒した玲生は冷たく笑った。

「馬鹿なのはそっちじゃん？瑠璃花サン。わざわざこんな人気ひとけのな

「いここで俺と二人きりなんてさ」

瑠璃花は自分の身体の小ささと軽さを恨んだ。

必死でもがくが、玲生はビクともしない。

そして、声を出そうとした瑠璃花の唇を、玲生は自分の唇でふさいできた。

（…！…や、助けて！）

と、おぼろげになる意識のなか突然、玲生の重さが無くなった。チツと舌打ちし、校舎の方に歩いていく足音を感じ、なんとか瑠璃花は身を起こした。

「…大丈夫？東条さん」

差し出されたハンカチを無意識に受け取り、呆然とそれを見詰める。
…私泣いてるやん。

「…ありがとう」

これも無意識に小さく呟くと、ポンと頭を叩かれた。

びっくりして顔を上げる。と、ハンカチをくれた人を自分が認識してなかったことに気付いた。

「あ、なんや理桜君やん…。…ごめんな」

「…………いや。俺の姿みて、すぐ逃げてったよ。…………別に、君がそんな責任を感じる必要はない」

心を読まれた気がして、思わず息をのむ。

「そんな…わかつとるし」

でも、押し倒されて、少し諦めている自分がいた。自分が、抵抗しなかったら誰も傷つかないのだろうか、考えていた。

自分が恐い。

ギュッとハンカチを握りしめる瑠璃花を珍しげに見た理桜は無言でまた何処かへ行こうとしたが、瑠璃花に呼び止められ、振り返った。

「…あの、な。私、今回無理かも、しれん…。だから、お願い…ハルヒを、守って、あいつから…」

「うん。フツーにそのつもり」

ひらひらと右手を振り、軽く笑う理桜に、瑠璃花は安心して苦笑した。

「不安やなあ」

「…。…おかしくない」

「…でも、ありがとな。…私も頑張る。私のせいじゃない…とは、やっぱ思えへんからな…」

小さく泣き笑いを浮かべ、微笑む瑠璃花に頷き、理桜は歩き出した。

「…。さて…」

瑠璃花も立ち上がった。

Sugar love 12

放課後。玲生以外の部員は全員、生徒会室に集まっていた。

「…リトルスノーホワイト？なんですか、これ」

楓は美妃の持っていた英文の台本の表紙を首を傾げて見た。

「アホ。そんなんやからウチに入れへんねん。なんでカタカナ英語やねんな」

翔太は笑顔で頷いた。

「あは。本当だねー。あ、お茶っぱ切れたから買ってきて」

「はい！行ってきました」

楓は喜んで出ていった。

あまりの不憫さに棗は軽く目頭が熱くなる。

…一体、生徒会長サマになにをしたんや楓…。

だが美妃の声に、棗は一瞬で切り替えた。

「えつと『Little Snow-White』…を今回のステージで上演したらどうか、と思って急遽台本を作ってみたんですけど…」

手渡された簡素な台本を眺めて棗はちらつと翔太の顔を盗み見た。
案の定、いつになく完璧な苦笑いを浮かべている。

「えーっと、なんで白雪姫？しかも…なんかすごい話し変わってない？」

美妃は遠い目をして、台本に視線を落とした。

「…昨日、雪姫から白雪姫の絵本が送られて来た後、電話がかかってきました」

翔太は仰天した。

「嘘っ！雪姫から、かかってきたの！？ハルヒちゃんがかけたんじゃないかって!？」

詰めよってくる翔太の真剣な眼差しに思わず美妃は後退りした。

「えっ…ええまあ」

「翔太。ちょっと静かにしーひん？」「あ…すまん。あまりに羨ましくって……。ごめんねハルヒちゃん…先どうぞ」

グズツと鼻水をすする翔太を気遣わしげに眺めながら、美妃は説明を急いだ。

「…アンタがマネージャーになって初めての仕事は前から決めてたの。このお芝居を必ず成功させて、撮ったデータをコッチ（英国）に送ってきなさい。…との。あ、この台本は原作を元にした改造版らしいです。雪姫が香坂先生に頼んで創ってもらったそうで」

「はあ…流石姉妹…声似てる…まるで雪姫みたいだったよ…」

一旦は止まった涙も、声色を少し似せた美妃の朗読で再び復活したらしい。

そっとしておこう。棗はそう判断し、美妃に訊ねた。

「そっかー。じゃ、役フリとか決めなあかなあ。白雪誰するん？ハルヒちゃんはおえへんの？」

美妃はコクコク頷いた。

「私は全力で裏方にまわらせて頂きます。…人数的に足りなかったら、木の役とか動物の役とかなら出来ますけど」

美妃のキツパリとした発言に、翔太はまったをかけた。

さっきまでのウジウジ姿はドコへやら、その甘い美貌を輝かせて美妃に宣言する。

「いや！役フリは会長である僕に任せてもらおうか。貴重な収入源であるハルヒちゃんは絶対参加で。…じゃ、今日はこれで終わろう。解散！」

雪姫が観る、という事を思い出した翔太はギラギラと意欲を燃やしていた。棗と美妃は勢いに押され、すごすごと退散することにした。

S u g a r l o v e 1 3

「はぁー…」

風呂上がり、瑠璃花はボタンとベッドに倒れこんだ。

少し目を閉じれば、あのコエが頭を巡る。

『アンタさえ いなかったら、私は死なずにすんだのに アンタさえ……』

「つつ………」

耳をふさぎ、ギュツと目を閉じる。

それでも、このイヤな汗と目眩のような気持ちの悪さは時間が経つのを待つ事でしか収まらない。

今回は久しぶりにきたが、習慣になってしまった…。

美妃に出会わなければ、癒されないキズを抱えて毎日一生こうするしか無かったのだろう。

「……あ」

今日の美妃の顔を思い出し、瑠璃花は真っ青な顔で薄く微笑んだ。

『瑠璃花…あの、お芝居出ない?』

『はぁ?』

『ほら白雪姫！まだ役は決まっていなかったけど、どーも人数足りないって言うか…本音言つと瑠璃花と一緒に放課後残って練習したい…。お願い』

あんなに必死な顔の美妃を見たのは久々だった。

『…ごめんなー。バイトがな…。それに、もう男嫌いとか理由にするの限界なんちゃう？あと二年もあるわけやし、一人で慣れな。がんばりいや』

美妃がしぶしぶ頷くのを待って、瑠璃花は逃げるように家に帰った。
今更ながら自分の汚さにヘドが出る。

…私こそ、いつまで逃げてるつもりやねん。

空っぽの状態で入学して、美妃に会って。
いままでの幸せが気持ちよくて。

でも

「…もう、ぬるま湯にはいれへんよな…」

こんな汚い自分が、美妃の近くにいるのは許せない。

S u g a r L o v e 1 4

中二になってすぐ。私の周りの日常に少しずつ変化が起ころうとしていた。

風になびく髪を苛々しながら適当に結んでいると、バンと私の机を玲生が叩いた。

「おい、瑠璃花。なんで来なかった」

「…なんやねんいきなり。どーした」

とぼけると玲生は怒鳴ってきた。

「昨日の放課後、教室で待っとけっていったろっが！なに勝手に帰ってんだよ」

瑠璃花は鼻を鳴らした。

「ふん。忘れててん」

「…ふざけんな」

「ふざけてへんよ?」

昼休み終了5分前を知らせるチャイムが鳴り、玲生は苛ついた顔で教室を出ていった。

瑠璃花はため息をついて机に突っ伏した。

「……………あほ」

クラスメイトのチラチラとした目線を感じる。

玲生の綺麗な顔立ちと強烈な色香は有名で、クラスが違う瑠璃花にわざわざ会いに来た事に興味津々らしい。

「……………。」

私だって馬鹿じゃないから、放課後玲生が何を言おうとしてたくらい、想像がつく。

一年の時、同じクラスで一緒にクラス委員をやってから、激突しあつてなぜか仲良くなつて、何度か告白されそうになつた事もある。だが今までずっと、何となく逃げてきた。

…別に玲生のコトは嫌いじゃない。

好きでもないが。

多分、私にとってその程度の存在なのだろう。

「瑠璃花ちゃん、スゴいねえ。あの白鳥君とあんなに仲良くつて…いいなあ」

「……………真理^{まじ}」

顔だけ動かして隣に座る女子生徒を見る。

少し細い目と白い肌の…お世辞にも美女とは言えないが、普通の、ほんわかとした雰囲気の子で、この頃やけに瑠璃花に付きまわっている。

けれど瑠璃花は真理を嫌いじゃなかった。なかなか女子から好かれなく、友達も少ない瑠璃花にとって、真理は数少ない友達だから。

その日の放課後、瑠璃花真理に誘われ一緒にお茶をのんでいた。

なにやら悩み事があるらしいのだが。

「瑠璃花ちゃん…あのね、私」

うつむく真理に、瑠璃花は笑いかけた。

「なんや？どしたの」

「私…白鳥君が好きなの…瑠璃花ちゃん…」

「…そっか」

それから、真理と別れて、今バイト先である家^{けえき}絵貴の休憩室で店長からもらったバウムクーヘンをかじっていた。

（アレは牽制…か？）

そんなことしなくっても大丈夫なのに。

実際、瑠璃花には昔から、密かに好意を抱いているヒトがいた。幼なじみで兄の親友でもあり、家絵貴の店長子息でもある、

ガラスと扉が開き、なにやらボロボロの青年が入ってきた。

「あつ、瑠璃花。どうそのバウムクーヘン。親父力作の新商品らしいんだけど」

朝田翔太。この人。

「ん…普通に美味しかったけど。…ってか本当に…大変身してるやん」

瑠璃花はしみじみと翔太を見た。染めて金に近かった髪は、元々の色素の薄い茶髪に戻っているし、煙草の匂いも一切しない。制服も着崩すことなくちゃんと着ている。

「そうか？ま、前の恰好にもそろそろ飽きてきてたし。…あーでもやっぱ愛のチカラかも」

クフツと見たこともない幸せそうな（気持ち悪い）笑みを浮かべる翔太に瑠璃花はお茶を吹き出した。

「へっ！？なに愛のチカラで。カノジョできたん？」

「ん？あ、言ってなかったっけ。…カノジョ…なんて恐れ多くてまさかなくてはくれないと思うんだけどな？…ぶっちゃけまさかの一目惚れで、今日もその人のため生徒会長になるために、ずーっとバスケしたりピアノ弾いたりトークしたり…大変だった…」

どんな話だ。

瑠璃花は動揺を抑え、勢いよく立ち上がった。

「え、瑠璃花どした？」

「ちよつと学校に忘れ物した！行ってくる」

「その恰好で？…あ、行つてらっしゃい」

外に飛び出した瑠璃花は走った。

とにかく、走った。

まだ春になりきってない空気の冷たさに頬が切れそうな痛みを感じたか、走った。

滅茶苦茶に走って、いつの間にか公園の中にいた。まだ蕾の桜の樹木の香りに惹かれ、息を切らしながら桜に近づく。

「……………。綺麗やな……………」

ジャリ、と砂を踏む音がして、振り向くと不機嫌な顔の玲生がいた。

「…………それまだ蕾だぜ」

驚いたが、やっぱり、となぜかそう思っただけで笑いがこぼれた。そんな瑠璃花に玲生はますます不機嫌な顔になった。

「なにやってんの、そんな恰好で。バイト？」

「あ。あー、メイドのカツコのまま……だから翔太驚いてたんか……気づかんかった」

家絵貴の制服は、デザイナーである翔太の母が作ったもので、かなり可愛いデザインになっている。

とりあえずメイドカチュを外した瑠璃花は首を傾げた。

「なんでここいんの玲生」

「質問に答えろよ！……俺は……散歩」

ほら、と玲生が指差した先には、桜林の向こうに美しい日本家屋が

見えた。かなりの豪邸に、瑠璃花はポカンとした。

「ふわー、華道の家元さんとは聞いとったけどホンマに自分おぼっちゃんやったんや…いや、そういう性格しとるから納得やけども…え、まさかここも自分の敷地!？」

そういえば公園にしては遊具もないし、人もいない。

「まあな…。でもお前も金持ちだろ?…って言うかどうやって入ったんだ。ここにいろの、家族や客以外は野良猫ぐらいしか見たことないぞ。迷子か？」

瑠璃花はくるりと踵を返した。

「まてまてまて」

「いやや不法侵入やんこれ!野良猫道を通ってきた自覚はないねん許してくれへん？」

「はいはい、とりあえずこつち座れ」

玲生に手を引かれ、ポツンと大きな桜の木の下に陶器の机と椅子が置いてあるところにまで連れて来られた。

やけくそで、素直に座る。

「……瑠璃花」

「なんや」

玲生は少し心配そうに眉をひそめた。

「…どうした、何かあったのか？」

思いもしない言葉と優しい声に、心を抑えていた何かが、崩れるのをはつきり感じた。

「……………最悪や」

妙に温かい涙がポロポロ頬を伝い落ちる。

それを袖で押さえながら、顔を隠して吐き出すように言葉を続けた。

「翔太、好きな人、できてんて…。しかもこっちが恥ずかしくなるほどベタボレしてて…」

「……………うん」

子供のようにしゃくりあげる瑠璃花に玲生は静かに頷いた。

「……………嬉しい…って言う、気持ちなんやけど……。でも、ホントは寂しくて…」

三年ぐらい前から、いつも、設定されたように完璧に笑う翔太を見ていた。

だが、この頃の翔太は…人間、らしくなつて。

翔太は、孤独を抜け出す術^{すべ}を見つけたんだと、さつき幸せそうな翔太を見て気付いた。

「なあ……。私汚いな。ずっと、翔太が本当の笑顔で……幸せになればいいと思ってたのに、今、翔太が笑ってるのが……嬉しいねん……イヤな、女やろ、私。だから玲生も、もっと素敵な女の子探しいや……」

涙でぐしゃぐしゃになってもお美しい、瑠璃花は儚げに笑った。そのまま帰ろうとする瑠璃花の腕を、玲生は捕まえた。ぎゅっと、その壊れそうに細い肩を抱く。

瑠璃花の柔らかな髪に顔を埋め囁いた。

「……………なら俺はもつと汚いな。本音を言おうか……？……………翔太さんにカノジョできたのはかなり嬉しい」

腕に噛みついてきそうな瑠璃花の気配を感じ、苦笑した。

「……だけど、それで泣いてるお前は許せない。…………俺の心は俺のものだ。誰にも決めさせないし指図も受けない。俺はお前が好きだよ……お前が死ぬほど悲しい顔してるときに、俺がめっちゃめっちゃ嬉しいなんて、もうこれで最後にしよう？」

強い意思のこもった言葉のくせに、声と体温がとても暖かくて。冷えた心に、スルスルと入ってきて。そこからは、ただただ涙が流れた。

桜は蕾が好きだ。咲かなくても、散らない。咲かなくていい。だつて散らなくていいんだ。

泣いている間、そんな事を思いついたように泣き泣き言つと、玲生はムツとしたようにこう言った。

俺が咲かせてやるよ。絶対に散らせない。どんな風や雨からも守ってやる。だからずっと俺の側にいる。

…そんな台詞、よく言えるなあ…恥ずかしくないん？

…お前がそんな事言うからだろ！他の男の未練なんか残されてたまるか。いいか、これからは満開の桜が好きになれよ。

……俺の心は俺のもんだって自分言っただやん。私の心は私のもんやろ

……。俺の事好きじゃないのかよ。

うーん、考え中にさせてくれへん？……心が追っつかへん。

そんな我が儘にも、数秒考え込んだ玲生は最終的に許してくれた。

…だから、いやだった。告白されたら、逃げられなくなる気がして絶対、玲生の隣は心地よいから。

S u g a r l o v e 1 5

…昔、あるところに麗しい王子がいました。

王子は継母である王妃をメロメロにさせてしまうほど麗しい青年でした。

あるとき、王子は嫁探しのため、三人の美しい姫が住むという森へと向かって行ったのです。

（「なあ…。話変わりすぎちゃう？三人の姫て」

「……しょうがないだろ。香坂先生があんなにノリノリで創ってくれて、今ナレーション練習までしてるんだから…」

しかし、行ってみるとそこは魔王のハーレムと化していました。

王子は三姫の中で末っ子の心優しい白雪姫に頼まれ、魔王に立ち向かって行きました。

見事、王子は魔王を倒し、七人の小娘と白雪姫の姉姫は正気を取り戻しました。

そして、王子と白雪姫は末永く幸せに暮らしましたとさ♪

「……………どうだ？我ながら良くできたと思うんだが」

フフンと得意気に笑う香坂は二人を振り返った。

ボケーンとしている部員を見て不満そうに額にしわを寄せる香坂に、
棗は慌てて駆け寄った。

「いやー、流石香坂先生ですわー。こおんな感動的なラブストーリー、よく思いつきましたねえ」

「そうか？自分なりに白雪姫のイメージをこねて固めたただけなんだが」

香坂は棗と翔太を見上げて嬉しそうに笑った。

小柄で美人な香坂は、私服を着た後輩のようで、教師には見えない。

それでいて以外と有能で頼れる先生である香坂に、翔太をはじめ生徒会メンバーは教師の中でも一番尊敬できる人物となついている。

……のだが。香坂には超迷惑な癖がある。

あは。

「朝田！絶対に王子は柏木を使えよ！柏木に王子衣装着せないと私の気がおさまらないからな！」

女の子（美妃はタイプど真ん中らしい）大好き。…宝塚っぽい娘が好きらしい。

「あの中性的な面差しとたっかい背！加えて女に対しての完璧な気遣い！あれだけ私の理想そのままな女子は見たことがない！教師として見ても、柏木はかなり優等生だし」

「…はいはいオッケーです。あ、先生女王役されますか？人数的に」

「いや、私はナレーターがいい」

「了解です。棗、今日の放課後、部員集められるか？役フリをした
い」

棗はニツと笑った。陽気にVサインをする。

「まっかせとけっ！」

Sugar love 16

部室に向かう途中で偶然玲生に会った。
そのまま一緒にテクテク歩いていく。

玲生は美妃に訊ねた。

「ねえ、なんでそんなに瑠璃花と仲良いの？」

パツチリした目、ふわふわ髪、どこから見ても可憐な、‘女の子’
という印象の東条瑠璃花と、中性的な容姿となにより、女子に対し
ての王子チックな言動をする（違和感なし）の柏木美妃は、とても
仲が良い。

はたから見ると、まさに『完璧なカップル』である。

「え、いやなんでって……」

美妃は本気で悩んだ。そういえば何でだろ。

黙り込む美妃に苛ついたのか、玲生は息を吐き立ち止まった。

「…玲生君？どうしたの、遅れるよ」

「……よくあんな女と付き合ってたね」

玲生は、今までの友好的な笑みを引っ込めて嘲るようにクスツと笑った。

「…………え？」

「教えてやろうか、瑠璃花の…、いや、裏切り女の昔話」

美妃は玲生を睨み付けた。親友を、侮辱されるのは、許せない。

「…………ぜひ。興味深い」

「…ギャッ」

突然、グシャッと肩と背中に大きな衝撃がきた。

「っ…………理桜さん…どいて頂けますか…」

本当はこの人、コアラなんではなからうか。

兄以外にこんなにベタベタされた事がない美妃にはもうそうとしか思えなかった。

自分より背の高いヒトが（日本では）あまりいなかったなので最初は

驚いたが今ではひつpegがすることに専念するほうが有意義だという事に気が付いている。

完全に先程までの暗い雰囲気壊した理桜に、玲生は諦めたのか一人でスタスタと生徒会室に向かっていこうとしたが、思いがけない理桜の言葉にピタッと足をとめた。

「あー…玲生、ホントの事教えてあげようか？」

「…は。意味わかんない」

理桜はもかく美妃の頭にアゴをのせて口の端を上げた。

「…もし、聞きたかったらコツチ。今のまま誤解を続けるんなら先に行つていいけど」

そついうと美妃の手を引いて理桜は国語資料室に入つて行つた。

ひとり廊下に残された玲生は少し迷つたが、資料室に足を向けた。

S u g a r l o v e 1 7

「理桜さん…この線こえたらダメですよ」

なんとか理桜から離れることに成功した美妃は真剣な眼差しで床の木の線を指差した。

「……………なんで？」

いつもの無表情をすこし不機嫌そうに崩した理桜は、それでも一応立ち止まった。

「なんで？…なんでって」

「…なんでもです！多分私今から戦わないといけないので！」

「……………えー」

「……………おい理桜」

「んー？あ……………」

電池が切れたようにパタと倒れた。

美妃は無意識に支えてしまっていた。

うわっ…自分でルール破ってしまった……。ってなにこれ仮病？

「はっ離れて下さい」

「えー…無理ー…。ってこらこら。待って玲生」

「帰る」

「待てって…玲生は、瑠璃花ちゃんがいきなり君を嫌いになって、逃げるように転校してたって思ってる？半分は合ってるけど」

獲物を捕まえたように美妃を抱きながら理桜は少し急いだ口調で言った。

「……帰る。俺、別になんの役でもいいから」

そっいうと部屋を出てしまった玲生を、美妃は追いかけた。

「…待って下さい！」

「…何？ハルヒちゃん」

「……私、何も知りません。瑠璃花と玲生さんに昔何があったのかも知りません。でも…あの、本当に瑠璃花を恨んでいるんですか？本当に？」

「……意味わかんない。じゃあね」

「あ……………」

唇を噛みしめ、自分の無力さを実感する。

でも…。あの時、瑠璃花が言っていた事が、玲生と関係あるとすれば…。もしかしたら。

眉間にシワをよせて考え込む美妃に、理桜がツンツンと肩をつついてきた。

「マジで部室いかないとやばいかも。遅刻しちゃうよ」

「え……いやぁー！」

美妃は姉から貰った腕時計を見て真つ青になった。理桜の手を引き（急ごうとしないため）全速力で走る。

「ねー、バトル上手くいった？」

「はい？…あの、……多分私や第三者が介入していいことじゃ、無
いような気がして……本人たちで、誤解を解かないとっ……はあっ
…着いた……」

以外と遠い。校舎が無駄に広いのも考えものだ。

「あつ来たきたー！…あれ？玲生はどしたん？」

棗の問いに、美妃は困った。どうしょ。

「お仕事じゃないっすか？最近また大きな発表があるらしくて、俺
の家にもたくさん発注来てましたカラ」

無表情を少しも崩さない玲生に、美妃は初めて尊敬した。

ふーん。じゃーしゃーないなど、棗も納得している。

ふと、思った。なんで理桜はすぐに私の居場所がわかったのか…。話している内容まで？

「ハルヒちゃん」

ニコニコした翔太の声にはっと我にかえった。

「あっ…はい」

「ハルヒちゃん、王子ね。主人公でーす！」

「は？」

ちょっと待って、という隙も与えず、翔太はサクサク発表していく。

「棗は魔王ね。もちろんヒールだから」

「もちろんって……？まあ、悪役カッコいいな！楽しみ」

「理桜、白雪姫と白雪姉×2と、お妃、どれがいい？」

全部女役じゃん。美妃は心のなかでツッコんだが、理桜はキラッと紫の瞳を光らせてキツパリと言った。

「じゃあ、白雪で！」

「はい了解」

……。いつか。

「うーんと、それじゃ僕が白雪姉1で…玲生は白雪姉2でいつかな。七人の娘は一般選考だし、ナレーションは香坂先生。後はお妃と狩人か」

しばらく考え込んでいた翔太だが、止めて、美妃に笑いかけた。

「じゃ、行こっかね」

「待って下さい！」

今までコソツと棗の後ろにいた楓が翔太の前に飛びだしてきた。

「楓……なあに」

冷めた目で笑う翔太に負けじと楓は続けた。

「お願いします！僕も出演させてください」

いつになく真剣な楓は美妃にも頭を下げた。

「えー、どうしようか」

棗が少ししたしなめるように言った。

「しょーた。姑みたいやで。ハルヒちゃん」

「はいっ！？」

びびる美妃に棗は破笑した。楓の肩をパンパンと叩く。

「マネージャー、決めたって」

美妃は驚いたが、迷わなかった。

「はい…もちろんお願いします。あ、翔太さん」

翔太は軽いため息をついた。

「はいはい。じゃ、狩人やっていーよ。よかったね」

楓はびつくりして最初戸惑っていたが歓喜に顔を赤く染めた。

「ありがとうございます！……………嬉しいです」

「…………ほらハルヒちゃん行くよ。理桜はついてくんなよ。大丈夫だから」

S u g a r l o v e 1 8

スタスタと家に帰る道を歩きながら、
自分でも驚くほど苛々していた。

「……………」

翔太さんに彼女が出来た（その当時、実際には強烈な片思いだが）
と聞いて、泣く瑠璃花に焦って告白してしまい、微妙な返事を貰っ
て、それでも前よりは瑠璃花も優しくなって、玲生にとっては幸せ
絶頂の時だった。

告白してから1ヶ月ほどたった頃、

…いきなり、瑠璃花は転校した。

家絵費で働く姿は変わらなかったが、玲生がいくら尋ねてもまるで
他人のような様子を崩さなかったし、しまいには無視してくるよう
になった。

瑠璃花は携帯も替え、玲生は完全に連絡手段を失った。

意味が分からなかった。呆然とする玲生の耳に入ってきた情報は、
あまりに信じられなくて。

そんな中、偶然に瑠璃花と道で出くわした。

嫌がる瑠璃花を無理矢理近くにあったカフェに押し込み、玲生は詰
問した。

「…なにがあつたんだ？どうして……お願いだから本当の事を教えて…」

心がキューツとなりながら瑠璃花の目を見ると何故か涙をこぼしていた。

「聞いたやろ？……玲生がうざくなってん。もうこんなん止めて。私に構わんで……。迷惑や」

ホロホロ涙を溢しているのにやけに強い眼光でキツパリと言われた。

そついうとさつさと出ていった瑠璃花を追うことも出来なかった。

信じられない。

だが、俺が……？

俺の、せいで……？

「嘘だろ……」

フツたことは星の数だが、フラれるのはなにしろ初めてで、どうすればいいのかわからない。

というか、フラれたのか俺？

突つ伏す玲生に、他の客がチラチラと視線を向ける。

玲生はカフェを出た。

「……………」

我ながら馬鹿だったな、と思う。

親の勧めで月岡高校にきて、東条瑠璃花の名を見つけた時はひっくり返るかと思った。

そして、玲生にまるで初対面かのように挨拶した瑠璃花とはそれから一度も目を合わせることはなかった。

男をとつかえひつかえし、柏木美妃といつも一緒にいる姿は玲生には納得のいくものだった。

ああ、俺は捨てられたのか、と自然に納得することが出来た。

その後、わいてきた感情は、復讐心だった。

瑠璃花に対してだけのものでは無い。

“女”を、見下した。

それで丁度スカウトされていた生徒会に入り、3日も経たないうちに多くのファンがついた。

このファンを増やすのが、目的だった。

この都合のいい女たちはどんなに俺が好きでも、想いが叶う事はない。

ただで微笑んでやるよ。錯覚をさせてやる。虚しいだろう？

人を愛するキモチなんて、そんなもんだよ。

まあ、先輩たちは俺みたいな考えで生徒会にいるわけでは無いようだったが。

翔太さんは雪姫さん目当て。

棗さんは翔太さんに引っ張ってこられて。

理桜は……なんだ？

まあいいや。

だけど、そうやって過ごしていた中、瑠璃花は一度も玲生を視なかった。

いつも美妃とベタベタベタベタしていた。

俺は何故か少しずつ苛々が溜まってきていた。

それで美妃を引き剥がしてまで、瑠璃花に話しかけてしまい……。逃げようとした瑠璃花を押し倒してしまった。

瑠璃花を見て、少し期待したのかもしれない。今なら俺を視てくれる、今なら、俺を好きになってくれるのだろうか、と。

だが、泣いて気を失いそうなほど怯える瑠璃花に、はっきりと感じ

た。

美妃が生徒会に入った最初は、瑠璃花が言うように狙っていた。美妃に嫉妬していた俺は、美妃に俺のことを好きにしてやろうかと考えていた。

だが……もうなにをしても無駄なんだと、その時感じた。

……だから今更、理桜の話なんて聞きたく無かった。
もう終わりにしたい。

S u g a r L o v e 1 9 (前書き)

花戸です。

瑠璃花と玲生がまだ出会ったばかりクラス委員になったばかりの中
—のお話です。

ちなみに瑠璃花はこの当時150cmしかありません（高一夏現在は163）。

玲生は中一ですでに170あったので（高一夏現在は173）、瑠璃花とは20cm差ですね（笑）。

Sugar Love 19

「うつそお。瑠璃花にそんな人がいるなんて信じらんない。ねえ白鳥」

中一の二学期。

この頃の瑠璃花は女子に人気があった。

一緒にいれば必然的に白鳥に会える。

それにどうみても白鳥と瑠璃花は付き合ってない。だってこんな話をしているぐらいなんだから。

やぎあやか
矢木綺香はそう心で思いながら、華やかな笑い声をたてた。
じっさい綺香は、自分に自信があった。

こんな関西弁女なら勝てる。

そうしかも、話を戻すと、こんな会話をしていたのだ。

数分前に遡る。

昼休み、瑠璃花と一緒に弁当を食べていた綺香とその他大勢（綺香と同じ目的）は瑠璃花に軽い気持ちでこんな質問をした。

「ねー、瑠璃花って好きな人とかいるの？ やっぱ…白鳥とか！？
仲いゝよねえ」

「あっわかるゝ。美男美女でお似合いだもんね」

瑠璃花はにつこり笑って否定した。

「まさかあ。それに私、好きな人いるで。まあ、片思いなんやけど」

この発言に、玲生目当ての女子たちはハゲタカのように瑠璃花に詰

めよった。

「うそお！！誰だれ、よかつたら協力するよ！」

「うんあたしも！って言うかコクっちゃいなよ。絶対成功するって」

自分の恋路に、強力な邪魔者は排除したい女子たちはキャアキャア騒いだ。

瑠璃花は顔がひきつるのを感じた。

アカン…。なんで言ったんや私…。

だがもう遅かった。

ギャラリィは増えに増え、瑠璃花は洗いざらい吐かされ、その後何故か玲生を女子が呼び……。いま何故かこんなことに。何故……………。

「……………」

玲生の迷惑そうな視線が痛い。
って自分呼んだん私ちゃうし！

「ねー知ってた？白鳥。幼なじみなんだって。残念だねえ」

綺香は玲生に笑いかけた。

玲生はプイツとそっぽを向く。

「別に。そんなのただの憧れだろ？イチイチ報告してこなくったつていいよ」

瑠璃花はイラツとした。

ええ〜？と笑いながら心で舌打ちしている女子たちの目を、まるで意識してなかった。

「ちょお玲生……。…憧れなんかやない！バカにすんなや！」

真剣にキレた瑠璃花は、ハツと我にかえった。

シーン……。興ざめた女子たちはスタスタと散って行った。

ああ…。なんで私は女友達が出来ないんだろう。

全ては。

「アホ！お前のせいでまたキレてしまったやん！謝れ！」

コイツのせい。

玲生はツンツと聞こえないふりをした。

「んー？なんか声が聞こえたような気がするけど…、あ、瑠璃花いたんだ。背低すぎ。見えない」

「……………」

人のコンプレックスを…。やっぱり。

「あんななんか大ッ嫌いや！」

Sugar love 20

生徒会室のすぐ隣にある生徒会準備室。

普段は衣装合わせなどに使われる資料置き場は、今ちよつとした仮設オーディション会場になっていた。

よくある長机に美妃と翔太は並んで座り、真向かいに20人ほどの女子生徒がズラツと横に整列していた。

学年はバラバラのようだがいずれもある程度見た目がいい女の子たち。

美妃はその女子たちの緊張と真剣な雰囲気圧倒され、おずおずと最初の娘の名前を呼んだ。

「えー…1番、じしんありす地臣亜里朱さん。自己紹介と特技披露をお願いします。では前にどうぞ」

ハイツと元気よく返事をして、勢いよく前に出た。

「地臣亜里朱、高三、演劇部、好きな生徒会員は白鳥君です！では、ヴァイオリン弾きます！」

パチパチパチ…。

「はい、ありがとうございました。では次に、あいまいみい合米未依さん。どうぞ」

「好きな人はもちろん翔太先輩です！英語で愛のスピーチします！」

「次、つかれたなあ塚礼田菜亜さん」

「棗様愛してますわ！では日本舞踊を」

「つね……………」

「理桜王子だいすき！じゃ駅名言いますね」

「美妃が疲れてきたので省略します」

「次お願いします…」

「私はハルヒ君が好きです！特技は絶対負けないじゃんけんです」

え、ファン！？
……ハルヒ君？

「あつほんとだー勝てない。すごいですね、ありがとうございます
た。では最後に柚宮ゆずみやしく紫紅さん」

はい、と来たのは、今まで全く気付かなかったが、大人しげなかな
りの美少女だった。

「高二、柚宮です」

「あ、紫紅ちゃん久しぶり。元気だった？」

ずっとニコニコとしていたが、オーディションが始まって初めて口
を開いた翔太はびっくりした口調で紫紅に話しかけた。

他の人たちに羨ましそうな視線を背中にうけながら、紫紅は可憐に
笑った。

「はい。1ヶ月ほど前にコッチに帰ってきました。あ、続けていい
ですか？」

どうぞ、と促され紫紅は続けた。

「特技は…歌です。歌います」

紫紅が目を閉じて歌いはじめた瞬間、空気が変わった。なんというか…澄みわたる。

パチパチパチパチパチ！

美妃は思わず呟いた。

「…空気清浄器……」

翔太も惜しみ無い拍手を贈っていた。

オーディションにきた女の子たちを全員返した後、翔太と美妃は最終選考をしていた。

20人を7人に絞るのだ。

「あの、紫紅さんってどういう方なんですか？」

美妃は仕事の手を休めることなく訊ねた。

翔太は少し迷った。まあいいか。

「彼女は…楓の婚約者というか、許嫁だよ。二人は幼なじみ。そうそう、有名な画家の愛娘でね。お父さんに付き合っで、よく一緒に沖縄行ったりしてる。さつきも会っの久しぶりで驚いたんだ」

美妃はいろいろ驚いた。だからさつき生徒会で好きな人言わなかったのか。

「え、許嫁……。今時、その言葉を知ってるこは少ないですよ多分……流石金持ち学校ですね」

翔太は吹き出した。

「いやいや、美妃ちゃんちめっちゃめっちゃ金持ちだよ？あ、あと紫紅は天才的な歌唱力と演技力もってるんだよね。お母さんが女優さんだからかな」

美妃は思わず手を止めてしまった。

「マジですか……。え、じゃあ紫紅さんは決定でいいですよね」

「うん。じゃああと8人……。こんなもんか。じゃ、お疲れさま。帰っていいよ」

優しく手を振る翔太に、美妃は戸惑った。

「あれ？翔太さんは帰らないんですか」

「僕、プリント作ってから帰るよ。もう暗いし送ってあげたいのはやまやまんだけど、ほら理桜いるから大丈夫だよ」

翔太が言い終わるやいなや部屋の外にいた理桜が美妃を嬉しそうに連れ出した。

「貰ってきます」

「おー。気づけてな」

Sugar Love 21

……ガン！

瑠璃花は派手に転んだ。いや、正確には旧体育館倉庫の冷たいコンクリートの壁に勢いよく押され打ち付けられた。

…瑠璃花が困惑した顔で瞬きしながら上げると、相手は不気味なほど静かな表情で舌打ちした。

「……………真理…？」

瑠璃花は混乱と痛みでグワングワンする頭を押さえ、呆然と呟いた。

真理は、そんな瑠璃花にナイフをちらつかせ瑠璃花の頬に押し当てる。

そして舐めるように瑠璃花の顔を見詰めながら、真理はクスクス笑った。

「フフ……。…ねえ瑠璃花ちゃん？私この時を待ってたから今スゴく嬉しいよ。……今まで散々馬鹿にされてきた私のキモチわかる？普通分らないよね、そんなお人形さんみたいに可愛くて、めっちゃ頭も良くて、学校で一人だけ堂々と方言使えるくらい自分に自信もあってさあ。いつも人を見下してる瑠璃花ちゃんにはね？今だから教えてあげるけど、瑠璃花ちゃんの事を素直に友達って思ってる娘はいないよ？ふふ…」

恐怖で動けない瑠璃花に、真理は何かに憑りつかれたかのように笑いながら、スラスラと続けた。

「ねえ聞いてんの？そのくせ白鳥君と付き合ってるんでしょ。…馬鹿にするのもいい加減にしなさいよ。瑠璃花ちゃん」

真理の押し付けてきたナイフがカツと熱を発し、タラタラと生ぬるく水のような血が頬を伝った。

いよいよ固まって動けない瑠璃花に、真理は鬼のような形相で切れていない方の頬を張った。

信じられない痛みを感じたが、だがそれで少し瑠璃花は冷静になった。

頬を張られて倒れ、動けないフリをしながらスカートのポケットに入っているはずの携帯電話を気付かれないように探る。

真理は興奮しているのか我を失い楽しそうに笑い続けている。

だが。

「なにしてんの！？」

瑠璃花の動きに気づき、抱え込んでいた携帯を取り上げた。

そしてソレを部屋の隅に投げ捨てた真理は、連絡をとられたかもしれないという思いが巡ったのか、カタカタと笑いながら怯えて震え止めた。

「ほおら……やっぱり私を馬鹿にしてるんじゃない……いいわよ……。白鳥君は諦めてあげる……。ふふッ、でも瑠璃花ちゃんは許してあげないよ……」

そういつと真理は走り、急いで倉庫を出ていった。

瑠璃花はなんとか携帯まで這っていき、メールを送ってそのまま意識を失った。

「瑠璃花、瑠璃花！大丈夫か！？」

怒ったように名を呼び続ける兄の声に、瑠璃花はうつすらと目を開

けた。

目の前には見慣れた自室の天井と棗の顔が見えた。

「あー私生きとったんや……」

「アホなこというなや！何があつたんや瑠璃花。早く、説明せえ」

瑠璃花は目をつぶって考えた。

「ちょ、瑠璃花！？」

「考えてんねん……」

なにが、あつたのか……、部活が終わった放課後、真理に倉庫近くに呼び出され、行ってみると、数人の（名前は知らなかった）男たちに囲まれ力ずくでその倉庫に連れていかれた。

鍵をかけられ、真理とふたりきりにさせられ……。そういえば真理はその人たちにお金を渡して礼を言っていた。

真理は、話が終わったらあなたたち瑠璃花ちゃんを好きにしているから、とも言っていた。

今更ながら悪寒がして涙が零れた。

棗は眉間にシワを寄せて静かに訊ねた。

そして棗に一部始終を話終わった時、携帯が鳴った。

……真理からで、今から電車で飛び込むという内容の電話だった。

Sugar love22

生徒会歓迎講演が一週間後に迫ったある日のお昼休み。

早々と食事を済ませた美妃と瑠璃花は、ある人に会うため、演劇部へと続く廊下を早足で歩いていった。

瑠璃花は隣を歩く美妃にむうっとな頬を膨らませて問いかけた。

「なあー。なんで私もー？って言うか誰目当てなんー？」

全く息を切らしていない美妃を、息絶え絶えな瑠璃花は恨めしく見つめた。どれだけ体力あんなこの娘。

「んー？秘密。でも瑠璃花連れてったほうがいいって棗さんが」

「はあー？」

ぶつくさ文句を言う瑠璃花を半分引つ張るようにして、美妃は演劇部の扉を叩いた。

待ち合わせをしていたので、目的のヒトがちゃんと待っていてくれた。

「こんにちは！百目鬼先輩」

ゲツと嫌な顔をする瑠璃花に、ぱあっと嬉しそうな顔で百目鬼^{ひゃくめき}蛍は
駆け寄ってきた。

黒ブチ眼鏡の愛らしい、そう、あの瑠璃花にフラれたヒト。

「こんにちはハルヒ君。…あ、瑠璃花さん！来てくれたの」

美妃は一応言っておこうと決心した。

「あの、百目鬼先輩。あの節は本当に申し訳……。瑠璃花に着替え
されられて男子制服でしたが……。本当は私女の子でして……」

蛍は一瞬きょとんとし、あははと困ったように笑った。

「いや、あの時気が付かなかった僕も悪かったです。すっかりハ
ルヒ君の美男子ぶりに動揺してしまつて…あ、いや、ごめんね！」

フツと諦めて目をそらしていた美妃に気づき、蛍は慌てて謝った。

「ああ本当にごめん！女の子に何度も君なんて……」

謝る姿もほんわかとしていて、穏やかな雰囲気の人だ。
背もそんなに高くなくて、美妃を見上げるようにして喋る。

「あ、いえ。実際ハルヒ君って呼ばれるほうが多いので気にしないでください」

グスツと変な笑い声をたてる瑠璃花は無視し、美妃は気を取り直して、本題に入った。

「瑠璃花、知ってると思うけど百目鬼先輩は演劇部の部長さんで、かなり実力のある方なんだ。で、今回生徒会で劇することになったでしょ、でも実は誰も演技とかしたことなくて……」

そう、まさかとは思ったが、生徒会は過去一度も劇をやったことが無い。舞台は主にトークショーや…だいたい舞台自体少くて、去年はかなり質の高い執事喫茶をしたらしい。

「それで百目鬼先輩に演技指導の協力をしてもらおうと……でね瑠璃花」

美妃は深々と瑠璃花に頭を下げた。

「?へ、何?」

「女王役、やって下さい!!--!」

ポカンとする瑠璃花に蛍も頭を下げた。

「僕からもお願いします。瑠璃花さんほどの適役はいない」

「……えー……でも時間がな……」

「大丈夫！女王はほんつとに一瞬だから、練習は本番前のリハ―サルだけで、放課後残らなくていいよ！」

再三の美妃の熱心な頼みに、瑠璃花は折れた。

「わ……わかった……」

美妃は目を輝かせた。

急いでパシッと指を鳴らす。

「ドレスの微調整お願いします！ヘアメイクも完璧に。あと台本渡して！」

どこにいたのか、本物の業者がズラリと出てきた。

「瑠璃花っ」

生き生きとした美妃は瑠璃花に告げた。

こついう、女の子を可愛くするのは大好きだ。

「今から衣装合わせなんだ。五時間目の体育は公欠になるから心配しないで！」

「こつ公欠！？どんだけ生徒会力もってんの…」

瑠璃花はプロのスタイリストに更衣室に引っ張られていった。

すっかりマネージャーの仕事に愛着がわいた美妃は蛭に礼を言うと、
自分も香坂お手製の王子衣装に着替えるべくニマニマしながら更衣室に向かった。

Sugar love 23

歓迎舞台2日前の放課後、演劇部専用体育祭にて

「ハル……なにあのちびっこ。何度も言うけどなんであんなの連れてきたの」

いつになく不機嫌そーな白雪理桜。

「や………すみません。まさかあんな豹変するとは。………つか」

美妃は理桜の姿をもう一度感慨深く眺めた。

スラリと背の高く華奢な理桜は女装でも似合っていて、煙るような睫毛に縁どられた淡い紫の瞳は神秘的に美しく、白い肌は少々の化粧で可愛らしさを帯びている。

せっかく普段の黒いカラコンを外すのなら、と翔太のすすめで瞳に合わせた薄紫のドレス。菫のように小さな黄色いレースがポイントになっていて、綺麗、という印象だ。黒髪はあくまでいつもの少し癖のある形でカツラは被っていない。それでも翔太に言われ、役の為に伸ばしているのもで女装に支障はない。

（でも……白雪って自然派な可愛さじゃなかったのかなあ。なんか百戦錬磨の美女ってカンジ？）

「……キレイですねー」

「女装誉められても」

美妃は苦笑した。

「ですよ。私もさっきいろんな人に誉めて貰いました」

我ながら珍しいタイプの女の子だよなと思う。

談笑していた美妃たちに、‘ちびっこ’から怒声が飛んだ。

「おいそこの王子と白雪！！ダベってる暇があるんなら台詞カンペキに言うようにしとけ！特にハルヒ！」

「はいっ！？」

蛭は容赦なかった。

「やる気ねーだろお前！棒読みもいい加減にしろよ。死ぬ気でやれ
！」

竹刀を振り回しながら怒鳴る蛭はまるで鬼神（小鬼？）のようだ。

綿菓子のような蜜は、一瞬にして逆らったら命の危険を感じさせる人になってしまった。

個人的に指導を受けるため美妃は蜜の前に行き、台本を睨み付けて息を吸った。

「…御義母様、では行って参ります」

「もつと感情こめて！今から嫁探しに行くってゆーウキウキ感と、可愛がってくれた女王との別れて言う哀愁！でもあんま哀愁強いとただのマザコンだから。適度に！」

「……………すごいな蜜。噂には聞いたけども」

居残り組（美妃と理桜）を可哀想に見ていた棗は少し蜜へ尊敬込めて呟いた。

魔王の衣装は動きにくく重いので、役者で棗のみジャージを着ている。

「ちょっと翔太に似とらん？二重人格って言う」

「そうか？……あ、ハルヒちゃん終わったみたいだな。今日はもう帰るか」

見た目の才能を最大限に使っている翔太は、実際白雪役の理桜より可愛らしかった。理桜が綺麗系なら翔太はどこまでも姫系。

美妃の心配を受け止めると、多分翔太が白雪を演るべきなのだろう。

赤いドレスを引きずって翔太は蛭に手を振った。

「終わるー？」

蛭は舌打ちして頷いた。
ギロツと美妃を睨む

「今日の課題は、分かってるな？」

「はい！家で死ぬ気で頑張ります！ご指導ありがとうございます」

S u g a r L o v e 2 4

（あ……、あの娘また絡まれてるやん……）

とはいえいつもの光景なので無視してそのまま廊下を通ろうとする
と、突然肩を叩かれた。

訝しげに振り返ると、たしか同じクラスの生徒だと思つ、男がいた。

「東条さんだよな？…ちょっと、時間あるかな」

瑠璃花はニコリと笑ってかわした。

「いえ、すみません。私今から職員室に行かないといけないんです」

じゃ、と背を向ける瑠璃花にその猫のような顔をした男は慌てて瑠
璃花の肩を掴んだ。

ぐいんと引つ張られて瑠璃花はバランスがとれなくなり、後ろにこ
けそうになった。

だがすぐにばし、と背中を支えられ、顔を上げると……。

(……うおっと)

その娘は瑠璃花を立たせ支えたまま、眉間にシワを寄せてその男を冷ややかに睨んだ。

「……女の子への接し方もワカラナイ男は人間のクズだよね。迷惑だ
って言ってるのわかんない？」

「……………っ」

その男は顔を真っ赤にさせ、どこかに走っていった。

瑠璃花はお礼を言おうと背の高いその娘に目線を合わせた。

が。

「……めん、ちょっと来て？」

いきなりその娘ははっとした顔をし、問答無用で瑠璃花を教室の隅に引っ張っていった。

「……どしたの」

「やー、それがね……」

その娘が困った顔でうつむくと同時に、教室にがやがやと数名の女子生徒が入ってきた。

その娘を見つけ、キャアキャア騒ぐ。

「あつハルヒ君見つけた。どこいったの、探したのよ」

（…そういえば）

瑠璃花はこのさい、ちゃんと言っておこつかなと思い、その娘の目を見た。

「柏木さんって女の子でしょう？なんで男子制服なんて着てんの。…あ、モテたいの？」

その娘は一生懸命否定した。

「まさか！コレはその…姉…に、着せられて…」

モゴモゴいう美妃に、瑠璃花は首を傾げた。

姉か。今まで本気で女子にモテるのが好きなのか、趣味かなんかだ
と思っていた。
って言うかどんな姉だ。

「ちょっとハルヒ君。聞ってるの？」

女子たちはハルヒに群がり、瑠璃花は弾き飛ばされる格好になった。

イラッとした。

全くこういう奴らは金持ちでもやること一緒だな。

美妃は苦笑いをし、瑠璃花と目を合わせた。

助けてーといった表情の美妃に瑠璃花はため息をついた。

「……ほらどきいや」

女子たちは、誰が言ったのか分からない感じで瞬きしていたが、ず
んずんと美妃に近づく瑠璃花に、え？という顔をした。

「本当は関西弁なんだ」

美妃のどこか嬉しそうな表情は無視し、瑠璃花はガン見してくる女子に向き直った。

「……なんや？なんか文句でもあるん？」

「…ちよつと、あなた新規？止めてよ。ハルヒ君はみんなのものよ」

新規だと？

瑠璃花は驚いて止めさせようとする美妃の腕に手を回して不敵に微笑んだ。

「わからへんの？私、この娘に告られてん。だから…もう迷惑行為はやめたってね？」

美妃は弱々しく笑った。

「さっきはありがとう」

「いや…別にええよ」

瑠璃花は気付いていた。

多分、この娘も友達いないんだろう。

「あ、さっきは告られたーなんて嘘ついてごめんな。思わず。」

美妃は首を振った。

「ううん。それに…東条さんはそういう娘じゃないって、知ってたし。本当に迷惑だったから。…それに」

美妃は顔を真っ赤にしてうつむくと、おずおずと首を傾げた。

「ずっと、友達になりたいなって思ってた…」

瑠璃花は瞬きした。

「あつ！そういう趣味とかじゃないよ。確かに男のひとより女の子のが好きだけど…いや、恋愛感情じゃないし」

「…私も、そうやな」

え？という表情の美妃。

「友達いーひんねん。私。お互いモテてつらいな。よかったら友達兼彼氏になってくれん？」

「…彼氏？」

「あ、嫌？」

傷つけてしまったか。

謝ろうとした瑠璃花に美妃はにっこり笑った。

「いいよ。周りにはそう思わせとこ。うわー嬉しい。この学校で初めて友達出来た」

瑠璃花は笑った。

「アホやなあ」

「…そっちだって友達いなかったでしょ」

「んなっ……」

瑠璃花は面食らった。

「言うんや……。そういうこと。いつもの王子キャラはどーいってん」

「なっ！意識してやってるわけじゃないよ」

「どーだかねえ」

「…そっちこそ。いつも優等生ぶってるじゃん」

むっつと頬を膨らませる美妃は、瑠璃花からみたら普通の女の子だ。

美妃は微笑んだ。

「これからよろしくね」

瑠璃花も自然に頬が緩んだ。

「じちらーこそ」

S u g a r L o v e 2 5

（あ……、あの娘また絡まれてるやん……）

とはいえいつもの光景なので無視してそのまま廊下を通ろうとする
と、突然肩を叩かれた。

訝しげに振り返ると、たしか同じクラスの生徒だと思つ、男がいた。

「東条さんだよな？…ちよつと、時間あるかな」

瑠璃花はニコリと笑つてかわした。

「いえ、すみません。私今から職員室に行かないといけないんです」

じゃ、と背を向ける瑠璃花にその猫のような顔をした男は慌てて瑠
璃花の肩を掴んだ。

ぐいんと引つ張られて瑠璃花はバランスがとれなくなり、後ろにこ
けそうになった。

だがすぐにばし、と背中を支えられ、顔を上げると……。

(……うおっと)

その娘は瑠璃花を立たせ支えたまま、眉間にシワを寄せてその男を冷ややかに睨んだ。

「……女の子への接し方もワカラナイ男は人間のクズだよね。迷惑だ
って言ってるのわかんない？」

「……………」

その男は顔を真っ赤にさせ、どこかに走っていった。

瑠璃花はお礼を言おうと背の高いその娘に目線を合わせた。

が。

「……めん、ちょっと来て？」

いきなりその娘ははっとした顔をし、問答無用で瑠璃花を教室の隅に引っ張っていった。

「……どしたの」

「やー、それがね……」

その娘が困った顔でうつむくと同時に、教室にがやがやと数名の女子生徒が入ってきた。

その娘を見つけ、キャアキャア騒ぐ。

「あつハルヒ君見つけた。どこいったの、探したのよ」

（…そういえば）

瑠璃花はこのさい、ちゃんと言っておこつかなと思い、その娘の目を見た。

「柏木さんって女の子でしょう？なんで男子制服なんて着てんの。…あ、モテたいの？」

その娘は一生懸命否定した。

「まさか！コレはその…姉…に、着せられて…」

モゴモゴいう美妃に、瑠璃花は首を傾げた。

姉か。今まで本気で女子にモテるのが好きなのか、趣味かなんかだ
と思っていた。

って言うかどんな姉だ。

「ちょっとハルヒ君。聞ってるの？」

女子たちはハルヒに群がり、瑠璃花は弾き飛ばされる格好になった。

イラッとした。

全くこういう奴らは金持ちでもやること一緒だな。

美妃は苦笑いをし、瑠璃花と目を合わせた。

助けてーといった表情の美妃に瑠璃花はため息をついた。

「…………ほらどきいや」

女子たちは、誰が言ったのか分からない感じで瞬きしていたが、ず
んずんと美妃に近づく瑠璃花に、え？という顔をした。

「本当は関西弁なんだ」

美妃のどこか嬉しそうな表情は無視し、瑠璃花はガン見してくる女子に向き直った。

「……なんや？なんか文句でもあるん？」

「…ちょっと、あなた新規？止めてよ。ハルヒ君はみんなのものよ」

新規だと？

瑠璃花は驚いて止めさせようとする美妃の腕に手を回して不敵に微笑んだ。

「わからへんの？私、この娘に告られてん。だから…もう迷惑行為はやめたってね？」

美妃は弱々しく笑った。

「さっきはありがとう」

「いや…別にええよ」

瑠璃花は気付いていた。

多分、この娘も友達いないんだろう。

「あ、さっきは告られたーなんて嘘ついてごめんな。思わず。」

美妃は首を振った。

「ううん。それに…東条さんはそういう娘じゃないって、知ってたし。本当に迷惑だったから。…それに」

美妃は顔を真っ赤にしてうつむくと、おずおずと首を傾げた。

「ずっと、友達になりたいなって思ってた…」

瑠璃花は瞬きした。

「あつ！そういう趣味とかじゃないよ。確かに男のひとより女の子のが好きだけど…いや、恋愛感情じゃないし」

「…私も、そうやな」

え？という表情の美妃。

「友達いーひんねん。私。お互いモテてつらいな。よかったら友達兼彼氏になってくれん？」

「…彼氏？」

「あ、嫌？」

傷つけてしまったか。

謝ろうとした瑠璃花に美妃はにっこり笑った。

「いいよ。周りにはそう思わせとこ。うわー嬉しい。この学校で初めて友達出来た」

瑠璃花は笑った。

「アホやなあ」

「…そっちだって友達いなかったでしょ」

「んなっ……」

瑠璃花は面食らった。

「言っんや……。そういつこと。いつもの王子キャラはどっいってん」

「なっ！意識してやってるわけじゃないよ」

「どーだかねえ」

「…そっちこそ。いつも優等生ぶってるじゃん」

むっつと頬を膨らませる美妃は、瑠璃花からみたら普通の女の子だ。

美妃は微笑んだ。

「これからよろしくね」

瑠璃花も自然に頬が緩んだ。

「こちらこそ」

やっと居場所見つけた。

S u g a r l o v e 2 6

らっ…ライトが。

「まぶし……」

モヤシっこ代表白雪姫こと秋桜姫は王子の胸に倒れ込んだ。
コスモス

「おっ…つちよつと秋桜姫!？」

台本にない行動に狼狽する王子。

すかさず執事兼狩人が（いわゆる子守）王子のフォローに入る。

「ハルヒ様！秋桜姫は俺に任せて、魔王をお倒し下さい!!」

「……ああ。…有難うカエデ!」

勇敢、爽やかに（ひきつり気味）笑っ（棒読み）美妃に、客席からは黄色い声が。

たどたどしさが本物の外国王子のようで以外とウケているらしい。

ぐつたりとカエデに支えられている秋桜もそういうのが好きな人は萌えらしい。

「全く…コスモスったら馬鹿なんだから。魔王様と一緒にいたら贅沢三昧なのに。ホントに馬鹿」

魔王の肩にしなだれかかっている姉2は妖艶な美貌で艶っぽくため息をついた。

同意を求めるように翔太を見る。

「そうですね。もつと頭を使って合理的な生き方を見極めなさいコスモス。貴女の治療費誰が払ってるか知ってんの？」

可愛らしく魔王の隣で扇子をパタパタする姉1。魔王の周りには紫紅など7人の美少女たち。

ホホ…と仲良さげに笑う姉1と姉2。王子は力の限り反抗した。

「ふざけるなあ！目を醒ませ、そいつは魔王だぞ！」

姉1 ←

「あら？そんな事言って、どう責任とるつもり？王子は所詮コスモスを妃にするんでしょ、私たちの生活はどうなんのよ。元はと言えばあんたたちが高い税金とってなんにも保障してくれないから生活に困ってこんな森の中住んでんの！」

七人の美少女（紫紅） ←

「そうですね…。それに対して魔王様は私たちになに不自由ない生活を下さるんですのよ」

そつよそつよと周りの娘も声を上げる。

美妃はポカンとした。

…あれ…。台詞違くない？いい人じゃん魔王。

動揺して思わず同意してしまった。

「…え、そつ、なの？」

観客が静まり、蛍がバシッと台本を叩きつける音がした。

…姉2

「……………そつよ？」

……………。

「だっ、騙されてはなりません！」

後ろを振り向いた美妃は驚いた。

「瑠……ルリ御義母様？」

「ハルヒ、あの魔王は女つタラシの超最低男なのよ！ゆくゆくはこの国を乗っ取るうとしているの」

「…え、ホントに！？」

美妃のあまりに間の抜けた声に、その場にいた観客全員が心で呟いた。

（…予備知識知っとけよオージ！）

コホンと咳払いした魔王が口を開いた。

「で？王子。どうする？戦うか？」

「さて皆さん、今日はどうもお疲れさまでしたー！」

棗ジュースだよの乾杯挨拶にキヤー！と製作に関わった女の子たちが賑わった。

速攻で女子に囲まれる部員と美妃に瑠璃花は少し微笑んで、超高級ホテルの大広間を出た。

ちなみに螢の家が経営するホテルの中の一つだ。

少し独りになりたくて。と言つかさつさと切り替えて美妃とはしゃごう。

…まだ劇が始まる前。化粧もしていない頃。

『……よ、久しぶり』

……………。??

すぐに言ってしまった事を後悔するような顔で逃げていったが……。
なんだったんだアレは。

まあいいか。なんだか本当に、じっくり考えている自分が可笑しい。

瑠璃花は自分でも驚くぐらい素直に笑った。
時の流れは偉大だ。
もう、いつの間にか自分は前に進んでいる。

少し前は、まだー。

コツ、と後ろで足音がした。

「…え。瑠璃花さん？行かないの？」

あ、蛭だ。

「…おー。見事にOffやん」

呟いた言葉は蛭には聞こえなかったらしい。

「え、なに？」

「なんでもなーい。どしたん蛭先輩。あ、スゴいなこのホテル。め
っちゃ綺麗」

蛭は微笑んだ。

それを見た瑠璃花は心がほんわかとした。
まるで子犬のような人だ。

「…え、蛍先輩行かへんとマズイって。監督やん。探してると思う
で皆」

「うん…瑠璃花さんも探されてたよ」

「あー…そうなんや」

少々の沈黙。

蛍が口を開いた。

「好きです。瑠璃花さん」

……………。

「…え、今ゆうんや…」

瑠璃花は瞬きし、思わず素でクスクス笑った。

「って言うか前も聞いたって。なんなんもー」

そうだった、こういう人だったこのヒト。

だから美妃まで持ち出したんだった。
泣かしたんやった。

「好きです。…なんで僕が瑠璃花さんを好きなのか、知ってる？」

「……うーん、外見？」

けっこう当てにいったのだが。
蛭は静かに首を振っただけだった。
いつもと違う、表情。

「最初は、可哀想だと思いました」

「……………はあ」

「沢山の人が瑠璃花さんに捨てられてて。それで、僕は瑠璃花さんを救いたくなっちゃった」

「……………救う？なにゆうて……」

蛍が近づいてきて、瑠璃花は後ずさった。だがすぐに背中に壁を感じる。

「黙って」

蛍は壁に手をついて瑠璃花の目を見つめた。

「過去なんて僕にはどうでもいいことです」

「……………簡単にゆうな。私は人殺したんやで？男関係で」

蛍の瞳に小さな炎が見えた。

「…玲生君。だよね」

「……………」

表情を無くし、黙り込む瑠璃花から目をそらした蛍は後ろの壁に声を掛けた。

「いるんでしょ、玲生君。出てきて」

瑠璃花は思わず体を蜷に隠した。

「…バレたか」

「聞いてたよね？」

「ああ…。だけど、瑠璃花。俺は全部知ってる。昨日棗さんから聞いた」

「…どういふ事ですか？つまり、アイドル部を無くせと？」

ふらつく体をなんとかベッドに沈め、雪姫は電話を握りしめた。

志貴が心配そうな顔で静かにこちらを見る。

『いや…そういうわけではないのよ。確かに、貴女と部員たちのおかげで、入学希望者は2割上がったわ』

柔らかで優しげな叔母の声。両親が無くなってからの三年間、日本での暮らしを助けてくれた。

そう、優しい人なのだ。そして優しいが故に、弱い。

『どうかしら。生徒会とは別の…そう、軽音部とか、個人で花木君とかいいんじゃない？』

「…すみません、叔母様。私は貴女の言う通り学校の為にアイドル部を作りました。でも、利益や名声の為にこれ以上動きたくはありません。それにそれが学校のためだと思います」

雪姫が言い終わると、問答無用で志貴が電話を取り上げた。
雪姫はそのまま目を閉じる。

『なっ…。それが雪姫さんの答えなの？』

電話口でもワナワナと怒りで震えているのがわかる。
志貴は眠ってしまった雪姫をチラリと見た。

「お電話変わりました。志貴です。…では、姉はそういっておりますので失礼いたします」

ピツと電話を切り、志貴は雪姫の髪を撫でた。
美しい姉の顔。

弟と妹を守ろうと、いつも懸命で、三年前のあの頃はその美貌に氷の様な冷たさが加えられていた。

姉の左手の薬指には、ターコイズの指輪がある。

あの人の指には、同じ意匠で雪姫が作らせたムーンストーンの指輪。

その鮮やかな青色は、

まるで、張りつめた細い糸のような姉を護るように。

（哀しい指輪だな…）

ムーンストーンは、恋人たちの石。

トルコ石は、旅の安全という意味もあるが、姉は多分、恋人の石として。その意味を、あの人は知らない。

志貴には、この状態を変える力があるモノには見えなかった。

S u g a r l o v e 2 8 (前書き)

花戸です。

このお話は、舞台本番1日前です。
打ち上げの前日ですね。

明日、瑠璃花は玲生とリハーサルで顔を合わせることになるので…
という兄の配慮でしょうか。
もう、そろそろいいかなと案も思ったのかも。

S u g a r l o v e 2 8

「…で、瑠璃花と電話繋がったまま飛び込みやがった」

だいたい話終えた棗がコーヒーをすすっていると、棗が信じられないといった表情で呟いた。

「…まさか。そんな事で瑠璃花は俺から離れたんですか」

棗はため息をついた。
そんなこと、か。

「ま、せやな。正直悩んだで。雪姫さんが君連れてきたの見て、うわー思たし」

玲生は訝しげに訊ねた。

「それでどうして俺を入れたんですか？」

「いや…雪姫さんの命令は絶対やし、君使えたしな。それに君に当たんのも馬鹿らしーし」

黙り込む玲生に棗は首を傾げた。

「でもな、なんで今まで自分で真実を知ろうとせんかったん？ 気まぐれで理桜が教えようとしたんも断ったんやる？」

部内で知っていたのは棗と理桜だけだった。

理桜には棗が話した。美妃にべったり張り付くついでに瑠璃花も護れという事で。

また黙り込む玲生。

「棗さん」

「んー？」

「どうしたらいいんですか…俺は。もうダメなんですか？」

玲生は髪をグシャグシャした。

気が付いた。

自分に対する異常なまでの拒絶は……………。

「棗さん……」

棗は出来の悪い弟を持ったような気になった。
全く。瑠璃花といいコイツといい……。

「知らんがな。…良く言えばダメ寸前、悪く言って他人以下、かなあ？あんま変わらへんけども。ほら、百目鬼とかも本気みたいやし。瑠璃花にとってあいつのがお前より数万倍いやつやろし」

「……………」

玲生が灰のようにサラサラと飛んでいくのが見えた。漫画みたいやな。

S u g a r l o v e 2 9

美妃は外で瑠璃花に何が起こってるかなどつゆ知らず、なんとか女子をかき分けごちそうにありついていた。

大成功に終わった（途中はどうあれ）歓迎パーティーの打ち上げはめちゃくちゃ華やかだった。

日本にきてからというものの、一人暮らしなので食事は適当にしていたから豪華な食事に目が眩む。

「美妃さん、お疲れさま。久しぶりね」

素で料理を物色していた美妃は叔母の声に飛び上がった。

「ぎゃっ…叔母さま」

柔らかな感じの服をきた叔母は一層優しい印象を受ける。

「お食事中失礼。ちょっとよろしいかしら。お話があるのだけれど…」

「あ、はい」

美妃に微笑んだ叔母は、言いくそうにチラッと美妃にペッタリ貼り付く理桜を見た。

「そちらの方は……」

美妃は慣れすぎて気にも止めなかった自分に驚きながらも理桜をパシパシ叩いた。

「こら、離れて下さい。ごはん食べてていいから」

不満そうな理桜がしぶしぶ離れたところで、美妃は叔母につれられて会場の隣の部屋に行った。
幸か不幸か瑠璃花がいる場所とは遠ざかる。

「…単刀直入に言うわ。実は、アイドル部の増設を考えているの」

「え、どういう…?」

「アイドル部の特徴はメンバーの写真を売ったりして収入が得れる所と、校外の大会に出場して、月岡の名前を広めることよね? 今まで雪姫さんがそれは生徒会だけでいいと言うから、そうしてきたん

だけれど…」

美妃は首を傾げた。何故私にその話を？

「でね、美妃さんにその手伝いをして頂きたいのよ。軽音部員を一新したり」

美妃は叔母を遮った。

「待ってください。軽音部とかは個人がやりたいと思って入るものですよね。強要は出来ませんし、生徒会だって入りたいという人を拒んではいません…はい。それに…」

美妃はこの頃、雪姫が少数精鋭をした意味が自分なりに少し解ってきた。

もし、学園に何十人もアイドルがいたら、ファンである生徒たちもまとまりが無くなる。

生徒会員がみんな仲良しだからファンも落ち着き結束力も出て、安全に応援できるが、もし別のアイドル部と生徒会が火花を散らしたらファンも敵対する部員や相手方のファンに何をするか予測が難しい。

ようするに、現状キープが最善なのだ。生徒会のメンバーを少し増やすのは可能だが、他に造るのは止めたほうがいい。

美妃が自分の立場を決めた事に気が付いた叔母は薄く笑った。

「全く…わかったわ。今のところは何もしない。いいわよ戻ってお迎えも来ているみたいだし」

「あー…はい、失礼します」

げっそりとした美妃は部屋を出た。
理桜がギューとしてくるのもほどく気にもならない。

「以外と…大変だね、マネージャー」

「大丈夫だつて俺が居るから」

なんじゃそりや…。

気を取りなおし、美妃は料理へと向かった。

S u g a r l o v e 3 0

志貴は深く静かに眠る姉のそばで揺り椅子に座り、重い本を読んでいた。

…だがどの医学書を読み漁ってみても、ここまで進行してしまった姉を救う方法は見つからない。

無駄な事で気を紛らわしている自分に腹が立つ。

だがそれよりも、素直に姉に踊らされているあのボケボケ男を殺したい。

ボタンと本を閉じた志貴は目を閉じた。

あのババアもアホ馬鹿なことを企んでいるらしい。

美妃は大丈夫だろうか。

…理桜がいるか。

雪姫は理桜の事を信用している。

というか、多分理桜が居なかったら美妃を残してイギリスに来るかとさえ拒んだだろう。

だけでも日本とイギリスでは、雪姫に対する後ろ楯の差があまりに違う。

志貴たちの親は、ほぼ駆け落ち状態で結婚した。

日本人の母の実家、三条家は、皇族の血をひく典型的な貴族のお家

柄で、伯爵家の次男でイギリスでは高貴な身分とはいえ“外人”の父は、母の家から見ればどこまでも“外人”でしかなかった。まして、長女の母を嫁がせるなど持ったのほか。

仕方なく父は母を連れて自分の家があるイギリスに逃亡。

気さくで美しかった母を伯爵家は次男の嫁としてアッサリ受け入れ、三条からの追っ手から母を守った。

そして両親が不慮の事故で亡くなってから雪姫や志貴、美妃はイギリスの邸宅に祖母と一緒に住んでいる。

雪姫や美妃が日本に住んでいる時は両親が残した遺産を使い、マンシヨンの一室を借りている。

何故日本に行き母の妹が経営する学園に通っているのか…。

美妃はその意味を知らないが三条の意図を解っている志貴にとっては不愉快極まりない。

よって、志貴がどれだけ妹をおもっても、日本へいくことは無い。

志貴は黙想しつつ舌を鳴らした。

「あーどうしようか…」

すやすや眠る姉を見つめる。

…まだ、信じるのかい？

S u g a r l o v e 3 1

「…離れて下さいってば。何度目ですかねこれ言っの」

「えー…。厳しい…」

「熱いんです！もう初夏です…って！」

ベリツと腕に貼り付いた理桜を剥がす。

二人のやり取りを見ていた香坂が呟いた。

「…はたから見ると普通にB L だな。いやオイシイ」

はあ！？と真つ青な顔をする美妃。

翔太はまあまあと笑ってパソコンを指した。

「ほら、もうすぐ雪姫が…あ、ほら」

数秒後、画面に満面の笑みを浮かべる雪姫が映った。

『はあい♪美妃元気〜？みんなも〜』

「雪姫！」

美妃は思わず手を振った。理桜もペコと軽く頭を下げる。

『うふふ、見たわよビデオ。良かったじゃない。香坂先生ありがとう』

香坂はえっへんと胸をはった。

「ああまあな。ちゃんと題名は白雪姫にしたから、お前も一緒だ」

『ふふ、嬉しいわ』

美妃は軽く驚いた。

そっという意味があったのか。
…いや普通もつと早く気付くか……。

美妃が自己嫌悪に陥っていると雪姫が不思議そうに瞬きした。

『あら？玲生は？』

「雪姫！それよりなっ、あのねっ」

自分も褒めてもらおうと身を乗り出す翔太を押し潰し、棗は苦笑いした。

「ちょっと野暮用…ちゅーかな。気にせんで」

『そう？あ、…美妃。叔母さまの事は知ってるわ。でも私に出来ることはないから』

「え」

『みんなで頑張りなさい。遠くから応援してる』

「え、ちょっと待っ」

美妃は眉をひそめた。理不尽な言い方ではなく…画像が悪いからかも知れないが、雪姫の顔色が。

翔太も気付いたようだ。心配気な表情で話しかけようとするが、雪姫の笑顔に遮られる。

『…じゃあ、頑張りなさいね。……あら、志貴』

画面一杯に兄の顔が映った。

『…おつと間違えた。難しいネ、コレ。美妃！元氣かい！？』

雪姫と同じ黒曜石色の瞳が美妃を見つけてキラキラ輝く。

翔太が一瞬ゲツとした顔をした。

かまわず笑顔の兄に美妃は頷いた。

「あ、うん元氣。久しぶりだね」

そういう美妃にいきなり理桜が目を覗き込んできた。

「……なんですか」

「…やっぱり、綺麗な薄い茶色だよね、美妃は」

「……目ですか？父に似たんですかね。そういう理桜さんも紫ですよ」

「俺は日本人の血の薄いからね。まあ黒髪カツラで黒カラコンつけたら見た目日本人だけでも」

『ボクの妹に触るんじゃないよこの変態オヤシ。知ってるかい、セクハラだよそれ……あ、そろそろ時間かな、……ショータさん？……美妃をよろしくネ』

「あつちよつと！雪姫」

フツと画面が切り替わった。追いつがる翔太が最後に見たのは志貴のアカンベーと舌を出した顔だった……。

S u g a r l o v e 3 2

「きゃー、海やー！やっぱここの海は汚いなあ」

そう、今美妃たちは生徒会の仕事で夏期合宿参加推進用の映像を撮るため連休を利用し、来月合宿をする旅館近くの海に一泊二日できていた。

文句を言いながらも日傘をクルクルさせてはしゃぐ瑠璃花の隣で美妃はカメラをセットしながら苦笑いした。

「でもさ、仕事っていうのがねー…。暑いし」

「なに言つとんの。せつかくあんなイケメンたちと海なんてこれって？楽しmanaアカン」

瑠璃花に指差され、砂浜にいる翔太や棗を見る。

（イケメン…ねえ？）

正直、外見についてはよくわからない。

普通より整った顔立ちだとは思うが…それだけ。

瑠璃花は呆れたようにため息ついた。

「あんなぁ…美妃べつに男嫌いちゃうやろ？」

「うん多分」

「男に対する人見知りが激しいだけやんか。なのになんで恋せえへんの？ほら例えばコレとか」

海に飽きて走り寄ってきた理桜を見る。

理桜は不思議そうな顔で瑠璃花に訊ねた。

「だよな。って言うかハルヒって男嫌いじゃないんだ？最初、翔太さんは顔で大丈夫だったって聞いたけど」

美妃は慌てた。

「冗談に決まってるでしょ。でも翔太さんが信じちゃったんだよ」

「ふうん」

瑠璃花はでも、と付け加える。

「小さい時から美形ばっか見て育ってきたからか、自分では気付いとらんみたいやけど美形と不細工の扱い違うで。男限定で。あっほらそれに、外見なんてどーでもいいって言っとなのもソレやな。異常に美形に慣れとんねん」

「ああ、なるほど」

理桜が関心して頷いている。

美妃はなぜか少しシヨックを受けながらカメラを構えた。

「ほら撮りますよー。早く行って下さい」

「いや良かったよ、本当に今日は美しいものを見ることが出来た」

銀髪の紳士に賞賛を受け、玲生はにっこり笑って頭を下げる。

生徒会が撮影のため海で遊んでいる時、玲生は華道家元白鳥の個展に少しだけ携わっていた。

玲生は会場の一角で自身の作品を少し飾っているのだが、幼少から花を活けるのに最高の環境で育った玲生が活けた花には決して少ないファンがついている。

先ほどの初老の紳士もその一人。

個展も無事終了し、てきばきと着物を着替え、玲生はある人に会いに行った。

待ち合わせ先は個展を開いていたホテルの下にあるカフェ。白鳥と昔から友好な関係の萩野家の跡継ぎでもあり月岡学園の理事でもある、萩野芙美子はぎのふみこがほんわかとした笑みで優雅に玲生に顔を向けた。

「お疲れさま。流石ね、見事だったわ」

「有難うございます。ですがまだまだ兄には敵いませんよ」

自分のお気に入りである玲生の兄、刹那せつなの名に芙美子は微笑んだ。

「そうね。私は刹那君が活けた花のほうが好きだけど、気にするこ

とないわよ？相手がちよつと早く産まれただけなんだから」

玲生は心で毒づきながらにつこり笑った。

アンタと俺は違うよ？

「ええ。でも僕は兄を尊敬していますから。僕の花と兄の花が違うのは当たり前ですし。それは今もこれからも変わらないと思います」

なるべく自然に言つたつもりだったが、芙美子は気が付いたらしい。一瞬冷たい目を玲生に向けた。が、すぐいつもの柔らかな表情に戻り玲生を見た。

「さてと、貴方たちのことだから話は知ってるわよねえ。今日は貴方の意見を聞きにきたのよ」

(…はい。ですね)

静かに微笑む玲生に芙美子はため息をついた。

「その様子じゃ、決まってるようね。もういいわ帰って」

「……失礼します」

ココアを飲みながら芙美子はキリキリと唇を噛んだ。
玲生といいあの娘といい本当に気分が悪い。

少しして、玲生と入れ違いになるように玲生がさつきまで座っていた席に猫のようにしなやかな動作で和服姿の青年が腰を下ろした。

玲生と刹那は6歳差の兄弟なので刹那は現在22歳。二人とも他を圧倒する美しさだが、真紅の薔薇が玲生なら刹那は純白の百合に例えられる。

猪突猛進型で生命力あふれる玲生に比べ、少し体が弱く細身なのでまた儚げだった。

刹那は小首を傾げた。

「大丈夫ですか？芙美子さん」

芙美子は目を細めた。

「ええ。どうせ目障りな女はみんな死ぬもの。今は、早くそれより」

芙美子にはっこり笑った。

「生徒会を潰さないと」

Sugar love33 (後書き)

花戸です。

新しい人物が多くなってきましたので少し整理してみますと、

柏木雪姫…美妃の姉。 18歳。

柏木志貴…美妃の兄。 18歳。

二人は二卵性の双子です。現在イギリス。

萩野芙美子…美妃たちの母の妹。月岡学園理事。 36歳。

白鳥刹那…玲生の兄。病弱。 22歳。

…と、このくらいでいいですかね。
では、ご一読下さり有難うございました。

S u g a r l o v e 3 4

美妃から見ると馬鹿馬鹿しい（仕事なので文句は無いが）撮影も無事終わり、瑠璃花と美妃は手配しておいた旅館でくつろいでいた。

「やっぱり瑠璃花がいて良かったよ。こんな旅館まで用意出来たし」

「ふふん。こういう時美人は得やなあ」

「うん、さすがにここまで良い旅館はなかなかね。あー疲れた」

あれから何かと生徒会に遊びに来るようになった紫紅と蛭なのだが、行き先を伝えたらなんとこの旅館も蛭の家が経営するものを準備してくれて、かなりのサービスをしてくれている。

自由にゴロゴロしていると、翔太たちが雑誌を片手に部屋に来た。

「見た？玲生がのってただけだ」

差し出された雑誌を見ると、華道の特集に白鳥家に取り上げられていた。

「今日の発表展の宣伝みたい。今回は刹那さんの作品を主にしてあるみたいだね…ほらここ」

翔太の指が差した所に玲生と刹那の写真が載っていた。

美妃は感動しながら瑠璃花に訊ねた。

「ねえ知ってた？すごいね」

「うん？刹那さんには何回があったことあるし。って言うか美妃知らなかったん？華道家元やんか、玲生んち」

「そうなんだ……」

記事に目を通す。

あ、と驚いて理桜を見上げた。

「この、よく出てくるA k i n o ってもしかして…？」

「うん。ウチ」

こつくりと頷く理桜に美妃は固まった。

お金持ちなのは知っていたが…。

棗が楽しそうに説明してくれた。

「理桜の家は昔から、国内最大シェアの生花輸出入販売をしてんねんけど、そのなかでも超最高質品だけを扱っているA k i n o は国内外問わずかなりの高級ブランドなんや。A k i n o は白鳥家御用達でもあるし…理桜の父ちゃんかなりのヤリテで、花以外にも色々

やっとなるみたいやけど、最近ではマカオでホテルとかカジノとか経営してるな。俺らん中でも理桜の家はかなり上クラスやもん」

棗の丁寧な説明は、一応家系的にはめっちゃ高貴な身分とはいえ、そこまで馬鹿みたいにセレブでもない世間知らずの美妃にとって衝撃の連続だった。

ついでに訊いてみる。

「えと、翔太さんとか棗さんとかのお家は、どんな…？」

翔太はクスツと笑って棗を見た。

「棗とか瑠璃花の家は、主に医療系…ほら病院とか持つてる。ウチは…ケーキ屋？」

戸惑った美妃に瑠璃花が笑いながら説明した。

「翔太はうちに比べたら庶民やでー。かなり美味しいケーキ屋やけど、翔太のお父さん…パティシエの方針でチェーン店も出しとらんし。あ、でも翔太のお母さんは有名な女優さんやけども」

どこが庶民？身近にいた人たちの後ろ楯に啞然とする美妃に翔太が苦笑した。

「性格悪いな瑠璃花。そんなお嬢様がウチのケーキ屋でバイトなんかすんなよ。…あ、でも生徒会は雪姫が厳選した奴らばかりだから、月岡学園のなかでも上のほうばかり集まってるから、驚くことないよ」

そういう問題なのだろうかと思っていると、理桜がノーと伸びをした。小さく呟く。

「それよりこちら辺やっぱイヤー…。海の近くってやだね」

翔太が心配そうに瞬きし、携帯を覗き込んだ。楓は正式な生徒会役員ではないので手続きに時間がかかってしまった。

「螢の言う通りだな…。大丈夫か？一応楓呼んだけど、あと30分くらいかかるらしいよ」

他愛ないことで瑠璃花と笑いあっていた美妃が顔を強ばらせた。

「え…。なんの会話ですか。まさか」

珍しく目を細めた理桜がこっくり頷いた。

「…イルね、こちら。この旅館から出たらうじゃうじゃ」

凍りついた美妃を棗と瑠璃花が慌てて励ました。

「もうすぐ楓くるから大丈夫やって。あいつ凄いねんで、理桜は視える人けど、楓は居るだけでソウイウの被えるんや。楓は視えへんらしいけど」

「な？元氣だしいや。この旅館内は蛭先輩が理桜の為にソウイウの近づけへんようにお札とか貼ってくれてるから安心やし」

理桜は視るだけでなく悪いものにはアテられて倒れてしまうので、翔太が事前に蛭に頼んでおいたのだ。ホテルや旅館経営をしている百目鬼家はソウイウ方面の専門家も雇っているらしい。

理桜いわく、この旅館は不自然なくらい清められていて、とてもキレイな状態のようだ。

美妃は青い顔でがつくりしていたが、なんとか微笑んだ。

「あは。いや別に私は視えるわけでは無いので…。ただあんまり得意じゃないだけです…気にしないで下さい」

うーんと翔太が提案した。

「じゃさ、楓が来るまで旅館から出れないんだし、課題でもやつく？」

一斉にゲツと嫌な顔をした部員にっこり微笑み、翔太はかばんから大量のプリントを取り出した。

「理事長さまが、授業受けないんならやれって」

S u g a r l o v e 3 5

「……あれ？…瑠璃花いない？」

ふと目を覚ました美妃は隣の布団で寝ているはずの瑠璃花をキョロキョロと探した。

(…？………うわ、月明かりすごい)

目を擦りながら窓に近づいて外を見る。

しばらく月に見とれていた美妃だが、ガシャツとゴミ箱を蹴ったような音が微かに聞こえて海岸を見下ろすと、瑠璃花のような人影が見えた。

一人でポツンと砂浜に座っている。

(る、瑠璃花？何してんの？)

どうしようかとオロオロする。

真夜中なので大声を出して瑠璃花を呼ぶことも出来ない。

そのままオロオロと瑠璃花を見ていると、瑠璃花に近付いてくる知らない数人の男を見つけてしまった。

(えっ？つちよつと)

迷わず部屋を飛び出した美妃は全力疾走で旅館を飛び出した。

「瑠璃花、瑠璃花っ？」

瑠璃花がいたはずの砂浜に辿り着くが、瑠璃花の姿を見付けられない

い。

「……どこ？」

月が雲に隠れてしまい、サッと周りが夜の闇に堕ちる。

と、昼の理桜を思い出した。

（「……やっぱり海の近くってやだね」）

……まさか。

でも、でも瑠璃花が。

海の音を頼りに砂浜を瑠璃花を呼びながら歩き回っていると、どうしてだろうか、自分が今どこにいるのか解らなくなってしまった。寒さと海の香りだけがキツくなってくる。

クラクラとしてしゃがみこんでしまった美妃に、少し遠くから聞き慣れた理桜の声があった。

少し緊張したような鋭い声。

「ハルヒ！返事！」

「まっ待ってよ理桜」

眠そうな声もする。どうやら楓もいるらしい。

「……理桜さん？」

夏のはずだがガチガチするほど寒くて小さくしか応えられなかったが、理桜は気が付いたらしい。

理桜は楓の左手をしっかり握りながらザクザクと砂を踏んで美妃を抱き起こした。

「ハルヒ……帰るよ」

低く優しく響く理桜の声が頭にフワフワ伝わる。

素直に足を動かしたいのだが、何故か身体が鉛のようで言うことをきかない。

チツと舌打ちした理桜は美妃にまわりついたモノたちを睨んだ。
よほど気に入られてしまったのか、これほど楓が近づいてきても美妃から離れようとしない。

「……ちょっと！何してんの楓さん！早くなんとかしてよ」

よく手は繋がれるが滅多に話しかけられたことのない理桜に怒鳴られて、楓はアワアワとしている。

「えっええ！？何を？」

「……使えねえ！」

プチッと何かがキレる音がした理桜はタンブラーに入れて持っていた“水”を楓にぶっかけた。

「っ冷たー！何すんだよ理桜君」

理桜はほっとして美妃を見た。

楓は気付いていないようだが今ので美妃に憑いていたモノがサッと散った。もう大丈夫。

「楓サン、ハルヒ背負ってくんない？気失っちゃってるから。俺も疲れてヤバいし」

「え、いいけど背負えるかなー」

「大丈夫、ハルヒは背高いけど軽いから。ほら急いで」

「うん……理桜君、手離してくれない？」

キュッと理桜に握られた左手を眺めながら楓は頼んだ。ちょっと美妃を背負いにくいかなーと思って。

理桜は舌打ちしながら顎で指示した。

「早く行くよ。左手の分は支えといてやるから」

そう言ってザクザク歩きだす理桜の端正な横顔を盗み見ながら楓は

ドキドキする心を抑えた。

（ハルヒちゃん以外のメンバーとかで理桜君が手繋いでくるの俺だけなんだよね。以外と愛されてるのかも？）

理桜は鳥肌がたつてゾワゾワしながらちらつと楓を見た。何故か頬を染め俯いた楓。

（……キモ。紫紅さんも哀想に。…しょうがないだろ手繋いどかないと寄ってくるんだから。旅館に入るまでの辛抱だ俺。頑張れ俺）

旅館に入った直後に目が覚めた美妃だが、余りに異様な雰囲気にかのまま寝ておこうかと考えた。

S u g a r l o v e 3 6

「はい、ちょっとそこに正座しようか」

15分前からニコニコしつつ美妃にくどくど説教している翔太をみて、棗と瑠璃花は部屋の隅でコソツと理桜に話しかけた。

「なあなんですぶ濡れやったん楓さん」

「ああ…ほらこれ」

理桜はゴソツと自分のリュックから2リットルのペットボトルを取り出した。

「『除霊の聖水』絶対利きます」…うわ。効かなぞ。なんじゃこりゃ市販されてんの？」

棗が興味深そうにペットボトルの中の水を覗き込んだ。

「市販って言うか、蛍先輩が紹介してくれた人が売ってくれた」

「えっ。いくらしたーん？」

「えっと…一本三千円ぐらいかね。通販もしてくれるって」

瑠璃花はため息をついた。これだから坊っちゃんは。

「効果あったからいいけどな。…ってか普通、憑かれたハルヒにか

けるもんちゃうん」

「寒いじゃん。楓サンにかけたら効果抜群だったし。そこらが一気に浄化されたもん。念のため、説教終わったら翔太さんが写真撮る前に楓サンと海岸散歩してくれるらしいよ」

楓は翔太に水をぶっかけながら歩くのだろう。

嫌がらせだな。

「…へえ、そーなんか。なんや体調よさそつやな自分」

理桜は棗に軽く笑いかけた。

「まあね。さつきその水飲んだし。もうすぐ帰れるし」

「あーな。…帰ったら次は体育祭か？今年は何すんやろうな」

しよんぼりした美妃を連れて翔太が口を挟んだ。どうやら説教は終わったようだ。

「まあ取り敢えず皆はクラスの優勝に貢献してきなよ。挨拶とかホントに生徒会的な面倒なのは俺と棗でするから」

ふうん…と頷くメンバーにっこり笑った翔太はさて、と上着をとった。

「まずは先に仕事（写真撮影）だけどね。先いっとくよ」

ついでこようとする楓を押し退け、さつさと撮影場所の旅館の近くの小さな公園に向かった。

まだ昼前なので気持ちのよい風が吹いている。

ちらつと腕時計を見る。

集合時間まであと一時間ほどある。翔太は迷わず電話を掛けた。

「……雪姫？…俺です」

美妃は翔太が出ていったドアを見ながら、棗に訊ねた。

「あの、翔太先輩の嵌めてるムーンストーンの指輪ってかなり意味深なところに嵌めてますよね。女性避けですか？」

前々から気になっていたのだが、何故かいま訊いてみたくなった。瑠璃花と棗の顔が一瞬ギョツとしたのに気付かなかった美妃はうーんと首をひねった。

「なんか見たことあるようなデザインだったんですね……でも思い出せない」

「おっ思い出さんでいーんちゃう！？あ…いやあ何かの思い違いやと思うし」

慌てる瑠璃花を理桜がソツと目で制した。

棗もはあ、と一つため息をついてグシャグシャと前髪をかきあげた。

「でもま、普通、知つとるべきやろ妹なんやし。俺らが判断するこ
とでもないような気がするけど…」

美妃は異様な雰囲気を目を瞬いた。

棗が迷って口を閉ざしてしまったので、理桜が薄く微笑んだ。

「結婚してるんだよ、戸籍上は。翔太さんはハルヒの義兄で雪姫さ
んの旦那様」

「……けっこ…ん？」

美妃は自分の目がみるみる見開いていくのを感じた。

『翔？久しぶりね』

コロコロと華やかな笑い声にほっとしながら、翔太はわざと不機嫌な声を出した。

「ちょっとはそっちから掛けてこいよ」

『ふふ…ごめんね。…翔、なんかこの頃寂しいの』

「……俺もだよ?」

『このところ、いつつも思うの。明日目が覚めて、もし気分が良かったらお出かけしようとか、お花を摘みに行こうとか。そんなことばかり』

「……うん」

『でもね、気づくの。ああ、翔は居ないのよねって。それなら…ベツドでゆっくりしたいほうがいいかって。早く元気になりたいもの』

いつものしっかりした雪姫とは違う、まるで幼い子供のようにふわふわ優しい雪姫。

翔太は自分の指輪を見詰めた。

(……雪姫。どうして)
声にならない、呟き。

『ね、翔。早く会いたいわね。美妃にも会いたいわ。棗や、玲生や…みんなに』

「そうだね。会いたいよ、雪姫。会いたい」

籍を入れたのは二人。

だけど、

指輪を渡してきたのは雪姫だった。

雪姫がイギリスへ行く事が決まった直後に。

何故かお互い違う石の指輪。

…一生嵌めるモノには、なにか違うような。
このままほうっておいたら、ずっと…。

「雪姫…。ごめん、約束守れそうにないな」

ゲホツと咳き込む雪姫に翔太はきっぱりと言った。

「俺、行くから。…待ってるよ」

Sugar love 37

「ただいまー」

何だかんだと疲れて帰宅した翔太を待ち構えていたのは、沢山のスイーツに埋もれた母だった。

父とニコニコ笑いあいながらプリンを食べていた母は翔太を見つけてニコツと可愛らしく微笑んだ。

元女優の母は今は服飾デザイナーをしていて、いつでも自身のブランドで可愛く着飾っている。

ファッションのコンセプトはフワフワキラキラ。

もうすぐ40歳にもなろうというのに、20後半に見え翔太の姉に間違われるという、妖怪のような若作りの母だ。

実際、翔太は確実に母の血を引いていることが良くわかる。

「おかえり翔太、見て、パパがこんなにお菓子作ってくれたのよ」

母のはしゃいだ様子に、父は頬を染め俯いた。

菓子作り以外は本当に平凡な父。

「せっかく梓^{あずさ}さんがアメリカから帰って来たんだ。これくらい良いだろう?」

翔太はマカロンを口に運びながら訊ねた。

「母さん帰って来たんだ。どしたの、珍しいじゃん」

母は天パのフワフワ髪を揺らしながら少女のように微笑んだ。

「ふふ、仕事も一段落ついたから。貴方たちに会いたくって。そう
そう静奈しずなにも」

柚宮静奈は梓の女優時代の親友で、紫紅の母親だ。テレビの仕事は
もう引退した梓だが、静奈とは頻繁に連絡をとっている。

「ふうん？あ、親父、店番俺やつとくからゆっくりしといて」

椅子に掛かっていた制服をとった翔太は父に微笑んだ。

「ああ…すまんな翔太」
母が嬉しそうに父にねだった。

「じゃあお散歩にでもいきましよう？そろそろ菖蒲が綺麗なんじゃないかしら」

「そうだな。行くつか」

「行っってらっしゃい」

幸せそうな父と母に手を振りながら、少し迷ったが翔太は両親を呼び止めた。

「あのさ……俺、イギリスに…雪姫に会いに行く。だから…」

「おお、行つてらっしゃい。気を付けてな」

顔を上げた翔太は父の微笑みを見た。

母も優しくクスクス笑った。

「馬鹿ね。奥さんほっぽいてなにしてるの。店番なんかいいから。今すぐ、行つてらっしゃい。あ、どうせまだチケットとってないんでしょ?」

そういうと梓は携帯をいじりはじめた。

父はどこかに電話をかけている。

「何してるの。全くもつ。準備しなさい」

「え、う…うん」

あまりの急展開になんとかついていくため、翔太は自分の部屋まで走った。

「……よし。とれた。まあ、長旅だが翔太ならなんとかなるだろ」

電話を切り、梓は夫に微笑みかけた。

「そうね……。……雪姫ちゃん、大丈夫かしら……」
暗い表情で梓は俯いた。

「最初から、私たちには本当のことを告白してくれていたからな……」

父、^{つよし}剛も遠くを視るように目を細めた。

雪姫は、完全設備の整った病院ではなく、自宅にいる。家でもかなり質の高い治療を志貴が受けさせているのだろうか……。

病院に行っていない雪姫の心には……どうしても翔太が必要なのだ。賢い雪姫だからこそ。

自分の命の期限など、簡単に解っているのだろうか。

小さな嗚咽をもらした梓の背中を、^{つよし}剛が優しくさすった。

「……あの二人の事だ。奇跡でも……起こしそうじゃないか」

「…ええ…。…タクシー、呼びましょうか」

ダダダツと階段を駆け降りてくる音に、梓は笑顔を作ってまた携帯を頬に押し付け髪で顔を隠した。

涙と一緒に、蘇ってくる記憶。

…イギリスに雪姫が行く、3ヶ月前。

翔太が雪姫を紹介してくれた時は、驚いたが梓も剛もとても嬉しかった。

馬鹿息子の大変そうな遅い初恋が報われたことに、二人で手を叩きあって喜んだ。

学生婚や、雪姫が純粋な日本人ではないことなどは、梓たちにとっては小さな事だった。

自分達も人より大変な結婚をしたからだろうか。
なにより、雪姫は翔太を変えてくれたひとだった。翔太の笑顔に戻してくれた優しいひと。

お互いに支えあうことの出来る、最高の夫婦になるだろうと。

…その、数日後だった。翔太が居ないのを見計らって雪姫は二人に会いに来たのだ。

まず、雪姫は梓たちに深々と頭を下げ、語り出した。自分は、進行した癌であり治る見込みはかなり低いこと。

まだ届けは出していないので結婚をなんとか白紙に戻したいのだが、翔太が頑として了承しないので、なんとか説得して欲しいと。

「私は、イギリスへ行きます。翔太君には絶対に会いません。まだ、彼は若いんです。私のせいで彼の一生を無駄にさせたくない…」

泣きそうな微笑みをやっと浮かべているのに、やけにきっぱりと雪姫は言い切った。

梓はただ呆然とした。息子のことを思っただけではない。

誰よりも、辛いだらう雪姫。

いつも天真爛漫でおおらかな雪姫が余りに小さく見えて。

剛は静かに訊ねた。

「だがそれは、君の本心では無いんだろう？…そう、翔太の意味でもない。本当にいいのかい」

雪姫はゆっくり顔を上げたが、応えることは出来ず、そのまま泣き崩れた。

その時、玄関に雪姫の靴があつたのに驚き、ゼーゼーと息を切らした翔太が部屋に飛び込んできて、泣いている雪姫をみて飛び上がった。

「っ！？……あ、そうか言ったのか、雪姫」

淡々と呟くと、翔太は雪姫の肩を抱いて梓たちに微笑んだ。

「離婚なんかしないよ。俺は雪姫を信じてるから、絶対治るって」

何も言えない両親にニコツとした翔太は雪姫の手を取り、立ち上がった。

「ちょっと散歩してくるから」

…小さなリュックを一つだけ背にからう翔太は、いつの間にか、あの時と同じ憂いを帯びた表情になっていた。

「…じゃあ、いつてきます」

S u g a r l o v e 3 8

「いや、ムリムリ。ムリやな、うん。てかアホか。いや、本気でアホやったんか自分」

玄関先で棗は一笑したが、あまりに真剣な幼なじみの眼差しに不安を覚えた。

「…………ごめん。行かせてくれ」

スツと目をそらし、翔太は棗の家を出ようとドアノブに手をかけた。

「っ！ちょ、待ちいな。本気で皆をほっぽってく気か！？理事長もなんか企んでるのに！？」

自分でも驚くぐらい必死に翔太を呼び止めた棗は、振り向いた翔太の表情に凍りついた。

「……………しよう…た？」

「くどい。…俺はお前らの保護者じゃねえんだ。…………俺と違ってお前たちはちゃんと雪姫に選ばれた人間だろうが。そのくらいどうに

かできる」

完全に気圧され、固まってしまった棗にちらっと目を向けた翔太は短い呟きを残して去っていった。

「帰る気はねえから」

「……あー…アンタですかー」

せっかく頑張つてイギリスに着いて最初に見るのがコイツか……。いや予想は簡単にできたが。

ブツブツ不満を呟く翔太に志貴はにっこり笑って訊ねた。

「何か言った？さあさあ車は待たせてあるんだ。急ぐヨ」

空港を歩きながら車へと急ぐ。

「……雪姫は」

「あー…。どうせスグに家に着くから」

ちよつと呟いただけでポンポン返事が帰ってくる。

「……………ですね」

そのまま二人は黙り込み、車が走り出してしばらくしてから唐突に志貴が呟いた。

「君は残酷だネ」

「……………雪姫と結婚したことですか」

「違うヨ。美妃のほう」

「……………?」

意表をつかれキョトンとした翔太を志貴はちらりと見た。

「君は、少なからず雪姫が死ぬかもしれないという恐怖を持ってここまで来た。…美妃は、雪姫の病気を知らない。だがもし雪姫の身体を知ったとしようネ?」

翔太は志貴が言わんとすることに気づき息をのんだ。
鋭い目で志貴は翔太を直視した。

「はたして美妃は、迷わず姉のもとに駆けつけられるだろうか。君が居なくなつて生徒会の主軸にならないといけなくなった美妃は」

志貴の冷たい目線から逃れるように翔太は窓の外を見た。
流れる景色が都心からいつの間にか自然豊かな風景に変わっていた。

Sugar love38 (後書き)

美妃でませんね(^ | ^ ;)

主人公だろ!?

……花戸です。

今日は誠に心苦しいお知らせがあります。

皆さまに読んでいただきここまで書き続ける事が出来たシュガー・プリンス、しばらく続きを執筆するスピードを緩めようという結論に達しました。

更新がかなり遅くなると思います。

皆さまのお時間を使って読んで頂いたのに……と、この結論に至るまではかなり悩みました。

しかし、やはりプロットもない物語で、かなり私の中でも混乱が生じております。ですが、自分の作品を適当に終わらすことは嫌なので、頭の整理が出来たらゆっくり執筆を再開させて頂こうと思います。

本当に勝手な作者で申し訳ありません。

これからは新しい物語も作りつつ精進していきたいと思っています。

Sugar love 39

ポロポロと、ただただ涙がこぼれた。
手にした封筒を、ギョツと握る。

「うそ……」

志貴は泣き続ける妹に向かって静かに頭を下げた。

「…ごめんネ、やっぱり君には最初から知らせるべきだった…。ごめん」

いつまでも頭を下げる兄に美妃は訊ねた。

「あと…どのくらい…」

美妃は涙で言葉が続かない。

「…雪姫は、今までの治療を受けていたらあと3ヶ月は生きていられた。だけど…」

「いいよ、私は」

「……………美妃」

「いいよ。だ…だってそれが雪姫の本当の…願いなんだよね？雪姫は…いつも私たちの、世話ばかり…。素敵だよ、二人で…一緒にいれて…」

「……………美妃。はあ……………分かったヨ」

そついうと志貴は携帯でどこかに連絡した。

「フフ…実はどんな手段を使っても雪姫を連れ戻せーって、命令出してたんだよネ」

「……志貴。雪姫と翔太さんの為に私が出来るのは、何も無かったように、生徒会を運営する、ことだよネ」

「…辞めてもイイヨ？三条からの援助は、別にそこまで必要じゃない」

美妃は頭を横に振った。

「うつん。やるよ。二人が守ってきたもの、だから」

「…そう？」

つまらなさそうな志貴に美妃は一生懸命花のような笑顔を向けた。

「うん。……志貴は、イギリス帰っちゃうんだよね？」

「おばあ様が心配だからネ。じゃあまたね美妃」

志貴は玄関のドアを開けた。

「もし翔太さんと雪姫がココに来ることあったら一発殴ってやってネ」

パタン、とドアが閉まり、美妃はその場に泣き崩れた。

…美妃へ。

元気？

笑っちゃうけど、私にはもう時間が少ししか無いんですって。

さっき志貴がボロボロ泣いて抱きついてきたわ。

C a n c e r : ガンだつて。

吃驚してことばも出なかった。

志貴が日本に来るなんて、よっぽどの事情があるんだろうな―とは思ったけど。

…と言うわけで、私はイギリスに帰ろうと思うの。日本で、たくさん大切なものが出来たのだけれど。美妃に、紹介することも出来なかった人も。

あら、遺書らしくないわね。

でも、貴女に伝える事はこれだけです。

どうか、どうか幸せになって下さい。

誤解しないでね、私は幸せだったんだから。

私の分まで幸せになるうなんて思わなくってもいいからね。

でも一つだけわがまま。生徒会の皆を、よろしくね。

私と翔太が、頑張つて作り上げた部だから。

特に理桜は心配だわ。

あのこは多分、美妃がいないと生きてられないわよ。貴女は憶えてないようだけれど、理桜は昔うちの近所に住んでいたのよ。

そう…こつちでの名前はリユカって呼ばれてたわね。

あ、貴女に心配かけたくないから、私の事は教えないよう志貴に頼むつもり。

最後まで自己中な姉でごめんね、美妃。

貴女の大切なものが沢山増えますように…。

雪姫

「たっ、大変ですわ！」

いつもの可憐な紫紅からは想像もつかないほど慌てた様子で生徒会室に駆け込んできた紫紅はそう叫んだ。

非常時を察して美妃たちは身構える。

が。空気のよめない楓が嬉しそうにポテポテと紫紅に近づいていった。

「こんなに天気も良いのに、どうしたの？」

「…どうしたのじゃありませんわよ！私は生徒会の皆さんに用があって来たのです。いいから貴方は空でも眺めておいて下さいませっ」

一気にまくし立て、放心している楓を押し退けた紫紅は美妃に事情を説明した。

「今や下の階はえらいことになってますわ、美妃さん。学園が、生徒会…というかアイドル部を潰そうとしているという噂が一部の女子生徒の間で広まったらしく、それが全生徒に伝わってしまって。反対を訴えデモを起こす生徒や、皆さんに真実を聞こうとこの室に

押し寄せようとしている生徒までいるんですよ!」

美妃を含め、部員全員が文字通り飛び上がった。

「と、取り敢えず落ち着いて下さい紫紅さん。多分学園長の仕業でしょうし……でも随分大雑把ですね」

学園長にも混乱は予想できたはずだけど。美妃の呟きに、玲生が口を開いた。

「まあ権力行使が一番確実だからな。あのおばさんが考えそうな事だ」

「……紫紅さん、それで今、現場はどうなってるんですか」

「瑠璃花さんと蛭部長が取り敢えず説得に行ってますわ。この部屋に来るのだけは阻止しよう。私は連絡係です。今のところ怪我をした方はいらっしゃいません。ですが……」

いま、怪我人がいない事に安堵した美妃と対称的に、棗は青い顔をしていた。

美妃はそんな棗をチラッと見て、全体に指示を飛ばした。

「生徒の鎮静は瑠璃花と蛭さん、楓さん、香坂先生にお願いしましょう。あ、部員の皆さんは出来るだけ姿を隠しておいて下さい」

この混乱のさなか、突然部員が出ていったらどうなるかわかったもんじゃない。美妃はそう判断した。

「いつ怪我人が出るかわかりません。棗さん、多分校医だけでは全体を把握するのは無理です。早急に医師の手配をお願いします」

「…ああ。わかった」

「あと、みんなに伝えて頂きたいんですけど。あ、紫紅さんこれを校内放送で流してもらえますか？」

美妃は緊張でひきつる顔でニコツと笑った。

「一時間後、第1体育館で説明会見をします、と」

Sugar love 41

『芙美ちゃん、あのね』

いつみても、宝石のように美しい彼女は、にっこり笑った。父や母が、昔から磨きあげてきた最高傑作の姉。

『わたし、好きなひとがいるの。お母様達には内緒よ?』

私は姉のいつにも増して可愛らしい表情を見詰めながら微笑んだ。

ああ、そうか。やっぱりあの御方も御姉様のものなんだ…。

姉は楽しそうに花つみを続ける。

『芙美ちゃん、後の事は頼んだわ』

『え?御姉様?』

私は首を傾げた。

芙美子は、萩野様に嫁ぐんでしょう?三条の時期当主は御姉様ですのに。

そう言うと、姉は困ったように微笑んだ。

『芙美ちゃん、家なんかに囚われちゃ駄目よ。貴女も自由に生きなさい。わたしが頼んでいるのはお父様やお母様のこと。多分わたしはもう二度と、お二人に会えることはないでしょうから』

私はあまりに吃驚して手に持った花を落としてしまった。

『…芙美子にも、もう会って下さらないのですか？』

姉はうつむいた。

『…ごめんなさいね、芙美ちゃん』

『ど、どこに行かれるのですか。御姉様、駄目です芙美子も連れて行って…！』

姉はどんどん遠ざかっていく。

私は追いかけたいのに、何故か足が重くて動かない。

『御姉様っ…』

はっ、と眼が覚めた。

いつも、ここで夢が終わる。

厳密にいうと、夢ではなく遠い過去。

「…ふう」

軽い頭痛がする。

窓の外に目を向けると、空に星が輝いていた。

…そう、あの後。

三条の跡取りで当時18才の三条花奈子かなこが、父の客人として来日していた伯爵家のイギリス人と駆け落ちした後の騒ぎは凄まじいものだった。

父はあまりのショックに倒れるし、姉に婿入りする予定だった御船家は侮辱されたと怒り、今後一切の関わりを絶つと言ってきた。

そんな最中、一人懸命に対処していた母は、かなり頑張っていたと思う。

そして取引先でもあり重要な関係の萩野家にまで縁を切られては困ると、当時15歳の私は正式に萩野時期当主と婚約した。

それで萩野家も三条の混乱を収めるのに手を貸し、何とか事態は収まったのだが。

三条には、跡取りとなる直系の子供がいなくなってしまったのだ。

もちろん、父の妾たちが生んだ子供も数人いた。

だが、元々気位の高い母がまさか妾の子を養子にするはずもなく。

姉は気が付いていたのか知らないが、その当時三条の事業は上手く
いっていなかった。

しかも父は入院中。

母はさすがに焦った。

まあ、今は事業は萩野の援助でなんとかあったのだが、跡取りが
いないのは厳しい。

そして数年後、風の噂で花奈子が男女の双子を生んだと伝わって
きた。

私もその頃、息子を授かったが、もう子供を産めない身体になっ
てしまった。

息子はたった一人の萩野の直系なので、三条に養子に出すのは不可
能。

母は当時相当悩んでいた。

そして…母は強行手段をとった。

イギリスの花奈子の子供…男子を、三条に差し出すようにと。

それで、今回の事は水に流してやると。

結局、花奈子達が死んでも志貴は拒否しているが。

「……生意気よ」

芙美子は爪を噛んだ。

花奈子が、御船の次男との婚姻を拒んでいたのは知っていた。
御姉様は、私に全部面倒事を押し付け自分だけ幸せになった。

だが、もっと吐き気がするのは、母だ。

3年前、雪姫が花奈子の遺骨を少しだけ持ってきた時。
母は怒り狂って雪姫を追いつかすかと思いきや、涙を流して迎え入れた。

あまり外国人風の顔立ちでなかったからかも知れない。姉の面影を残す彼女を、母はいとおしそうに抱き締めた。

そして母はなんと、せめてもの償いにと伯爵家への金銭的援助を言い出したのだ。

雪姫は断ったが、母に言われ私も嫌々ながら説得した。
そうしたら、月岡高校の利益を上げる代わりに援助を下さいと言ってきた。

試しに好きにさせてみると、なんと入学希望者数が2割り増したのだ。

それで母や萩野家まで雪姫を賞賛した。

私は信じられ無かった。

だいたい私は、花奈子たちの事故死は三条が仕組んだのでは無いかと疑っていたぐらいなのに、雪姫に対する母の態度を見ると、絶対に違うと分かった。

まったく、忌々しい。

ようやく雪姫が3年になって卒業する年になったのに、今度は妹が出てきた。

だが、もう花奈子の子供たちが悠々と学園生活をおくっているのは許せない。

学園に、いられなくしてやる。

S u g a r L o v e F

色とりどりの薔薇が美しく咲き誇るイングリッシュ・ガーデンに二人はいた。

茶髪の清楚な貴婦人はチョコをついばみ、物腰の柔らかい紳士がいともしそうに彼女の髪をすくう。

彼らは、やっと逢えたという顔をして、微笑みあった。

そして、彼らの大切な二人に、祝福を歌った。

「ええ、その書類は向こうに。…は？ふざけないで下さいネ。期日に間に合わせるのがそちらのお仕事でしょうガッ」

志貴は携帯と近くににいる社員にイライラと指示を出していた。

「…ここはイギリスの会社。志貴が立ち上げた。

伯爵家の昔ほどない資産を増やす手段として、志貴が始めた。主にアンティークの家具を売っているのだが、志貴の少ない人脈も手伝い、かなり良い出だしをきった。

志貴は携帯をきり、ふうとため息をついた。

（ま、たのしーからいいけどネ、あ…美妃に教会の予約頼まれてたんだった。忘れてたヨ）

フンフンと鼻歌を歌いながら志貴は会議室に向かった。

「瑠璃花さん！明後日おひまですか！？」

蛍が頬を赤らめながら瑠璃花に尋ねると、玲生がギロツと蛍を睨んだ。

「あ、うんえーよ？…玲生。あんたはブーケのデザインできたん？」

「……これ」

手渡された紙をじっくり見詰めた瑠璃花は満足そうに頷いた。

「えーやん。流石。会場の花も全部任せてえーんやろ？」

「ああ。花は婿が無料でくれるらしいからな。使い放題だ」

「よし。じゃ、明後日は披露宴用に使うホテル探しましょうね瑠璃花さん。二人で」

「……蛍さん。ぽつと出のくせにでしゃばらないでくれません」

瑠璃花はいがみ合う二人にクスクス笑った。

「あら、こちらも素敵ね。どうしますお着物。……結局、花奈子と雪姫さんの式は…ね」

「……御母様。私は間違っていたのでしょうか」

芙美子は嬉々として着物を選んでいる母に呟いた。

「……そんな事、わたくしにもわからないわ、芙美子さん。でも。貴女も、そろそろ自由に生きなさい。貴女は今、幸せでないの？」

はっと息を呑みうつむいた愛娘に、母は笑いかけた。

「さ、どうしましょいうねお着物。披露宴は、黒じゃなくてもいいとおもっただけねど」

「…いえ、御母様。私は黒がいいですわ。私は嫁いだ身ですし、誇りをもっていますから」

そう？と笑う母に、芙美子は素直な笑顔を見せた。

「楓、紫紅ちゃん受付にいたけど。いかへんの？」

棗は隅っこでじめじめしている楓に首を傾げた。

「いや…だって…。紫紅、すぐくモてるんですよね…もう僕なんかいないほうがいいのかなーと。許嫁とかって縛り付けるのも、ねー」

じめじめじめじめとした楓に棗はため息をついた。

なんとか受付に戻そうと説得を試みようとして楓を見ると、あ、と楓は口を開けて棗の後方を見ていた。

「…理桜さん……」

「困るよ、サボっちゃ。ちゃんとお客さんの除霊してよ」

それに、と白い背広を着た理桜は微笑んだ。

「紫紅さん、待ってたよ？」

走って受付に向かう楓を理桜と棗は微笑んで見送った。

「さて」

「俺も奥さんとこ行ってくるね」

香坂は花嫁を見て満足げにニンマリ笑んだ。

「完璧にできた。元がいいのもあるが…綺麗だぞハルヒ」

ドレスは瑠璃花が選んだ。百合を基調としたブーケはAkinoを使い玲生が創った可憐なもの。

そしてー…。

「すごく綺麗。美妃」

私の旦那様。秋野理桜。

美妃は泣きそうな顔を華やかに輝かせた。

「ありがとう、理桜さん……」

S u g a r L o v e F (後書き)

皆様、やっとシュガー・プリンス完結しました。
今までありがとうございました！

花戸紗世

Sugar Love letter (前書き)

花戸です♪

シュガプリ、かなり前に完結させて頂いたのですが、PV16000とか越しちゃいました…。

嬉しくて…番外編を書いてしまいました。

今回のお話は、まだ白雪姫の劇が終わってすぐのお話です。

お楽しみ下さい

Sugar Love letter

まだ日は高かった。

両親は仕事をしに行つて、暇になつた俺は近くを散歩することにした。

この国に来たのは二度め。

とは言つても昨日着いたばかりだから、外を探検しようかな、という今では考えられないほどの好奇心と可愛らしさを持った俺は、お手伝いさんの目を盗んで一人で家をぬけ出した。

だけど、幼くて無邪気といつても、所詮同じ人間。

疲れた俺は綺麗な庭園で一休みすることにした。……誰の敷地か？
まあ、問題ないだろう。

予想通り襲つてきた眠氣に従い、そのまま芝生にころんと横になった。

大人になれば、もうこんな自由に出来ないだろうから、今のうちに休んでおこう。とか思いながら。

「かあさまー。みてみてー。だれか…ねてるわー」

3歳くらいだろうか…。幼児特有の可愛らしい声につつすらと目を開けた俺の頬に、小さな手が置かれていた。

その子の近くにしゃがみこんだ黒髪美女が、涼しげな目元を面白そ

うに細めて俺を見た。

この国で家族意外で日本人を見たのは初めてだった俺は、少し吃驚した。

「ほんとねえ…。あら、起きたわ」

そう言つてぶにぶにと俺の頬を細い指で押してくるので、俺は起き上がった。

「うわー。きれいなおめめねー」

そう言つて笑いかけてきたその子はキュツと俺の手を握った。

黒髪の母親に駆け寄つてきた驚くほどそっくりな二人が、むつつと頬をふくらませた。

着ている服からして、多分男と女。双子、かな。

「しき。あのおとこあたしたちのハルヒとてえつないでるわ」

くるくるに髪を巻いた女のほうがヒソツと隣にいる男に言った。

「ゆるせないね、ゆき。どうしてやろうか」

ヒソヒソヒソヒソ何か言い合っているのはわかったが、そこまで英語が堪能ではなかった当時の俺には聞き取れなかったのをおぼえている。

きよんとする俺に、黒髪美女はああ、と頷いた。

「秋野さんのお子さんね。初めまして。えっと」

日本語で話しかけてくれたので俺はいくらか安心出来て、名前を言った。

「り…りおう、です」

「まあ、どんな字を書くの？」

「えっと…。るりの、さくら」

「瑠璃…。璃桜くん。まあ…綺麗な名前。ほら、貴方たちは？」

しがみついている双子にその人は言った。

「…ぼくは、しき。よろしく、りおう」

ニコツと笑った男のほうとは対称的に、女はツイツと顔を背けながら言った。

「…………ゆき」

ほんわかと笑んだその人は、まだ俺の手を持っている子を見た。

「このこは美妃よ。ほら、ご挨拶」

ギュツと俺を抱き締めたハルヒはえへへと笑った。

「はるひです。さんさいです」

……こいつが一番しっかりしてるように見える…。

ハルヒは黒髪美女を見た。

「かあさまはー？」

「あら、そうね。ごめんなさい」

黒髪美女はにつこり笑って俺の頭を撫でた。

「花奈子です。……ああ、そうだ。おうちの方々が必死になって貴方を探していたわよ？ 貴方、黙って出てきたのね？」

「だって…。ひまなんだ」

「あら。お部屋より外のほうがお昼寝には気持ちがいい？ 奇遇ね、私もこっちが好きだわ」

「……かあさま。父さまだよ」

志貴がほら、と後ろを差した。

そこには金髪のいかにも美男、といった男が滝のような汗をだらだらと流しながら必死の形相で俺たちに駆け寄ってきた。

「かつ…花奈さん！ どーしていきなりふらつと子供達つれて居なくなったと思ったらリオウ君と一緒にいるの！？ 君が誘拐したと思われたらどうするんだ！」

「あら……ごめんなさい。璃桜君を見つけたから連れていこうと思ったのよ？ それが何故か話し込んでちゃって」

「とうさま……。いくらなんでもゆうかいにはならないわ」

雪姫が呆れたように呟く。

父、エドガーは疲れた微笑を浮かべた。

「それがね……。こっちを見てごらん」

建物を挟んだ向こう側を全員でひょいっを見ると、執事やメイドが泣き叫ばんばかりに璃桜の名を呼んでいた。

「気付かなかった…？」

「ええまあ……。ごめんなさいエドガー。璃桜君は私が責任もって連れて……」

「いや。お願いだから君はじっとしてて。……そうだ」

エドガーは璃桜にべったりしている娘を見てにっこり笑った。

「あのお……」

「ん？どうしましたお嬢さん」

秋野家の執事である山咲は突然服を引っ張ったかなり幼い少女に小さく微笑んだ。

四歳の若君がいなくなった一大事とは言え、人の良い彼はその少女に視線を合わせてしゃがみこんだ。

少女はえっと…と困ったような顔をして、庭の植木を指差した。

「うん？」

振り向いた彼の目にうつったのは…。

「りっ、璃桜さまー！」

慌てて駆け寄り抱き上げる。

璃桜は眠たそうな目をして老執事を見た。

「あ、山咲さん」

「あ、じゃないです！今までいったいどこに？」

「そのことあそんでた」

見ると少女はにこにここと微笑んでいた。

「ハルヒっていうんだ」

「はるひ…。隣の伯爵家の娘さんですか！？ああ……………なるほど」

こんな小さな子と遊んでいたのに璃桜さまを見付けられないなんて

……………完全に私どもの落ち度でございますね……………。

山咲は少女に優しく微笑みかけた。

「璃桜さまと遊んで頂いてありがとうございました。また…遊んであげて下さいませ」

「うん♪じゃあね、りおうくん！」

「うん……バイバイ」

いつになく幸せそうな笑みを浮かべる璃桜を、山咲は嬉しそうな顔で抱き締めた。

「見付かってよかったー…！今度外出されるときは一言山咲に言うてからにしてくださいねっ！」

「うーん」

「あっ！璃桜さま…！」

「見付かったんですね！よかった」

「……………」

沢山の人に囲まれながら、璃桜は睡魔を感じ微睡んでいた。

（また、あえる）

そしたら今度はゆっくり本当に遊びたいな…。

「…璃桜さん、眠ったまま笑ってるんですけど」

「ホントだねー…。あ、起きたよ」

パチッと開いた瞳の綺麗な紫色に美妃は少し息をのんだ。

そんな美妃に璃桜はすつと手を伸ばした。

「……おつきくなつたねー」

「へ？」

「夢、見てた。幼い美妃と…あ、そうだ雪姫さんもいたよ。多分5歳」

「んなつ！」

翔太はガシツと璃桜の肩を掴んだ。

「ずるいぞ！俺も見なかったー！」

「あ、そつすか。残念だったね」

ふふん。と得意気に笑う。

……けど、俺がエドガーさんと花奈子さんに会ったのは、あの日が最後となった。

それに、美妃にも。

数ヶ月前にこの学園で再会するまで、逢えることは無かった。

璃桜は心からの笑顔を美妃に向けた。

「いーっぱい、遊ぼうね？約束したんだから」

「は！？してませんよ？」

目を丸くする美妃に翔太はため息をついた。

「寝ぼけてるんだよ。さ、ほら資料まとめないとね」

「はい…」

なにか、大切な事を忘れている気がする…ような。

小さく首を傾げる美妃を、璃桜はいつものように抱き締めた。

「美妃……大好きだよ」

「……本当に寝ぼけてらっしゃるんですね」

美妃はやれやれと呟いた。

S u g a r s u g a r t i m e (前書き)

P V 2 0 0 0 0 と か … (p l ;)

お気に入り登録して下さいの方も……。

ありがとうございますー (TOT)
感激です……。

そんな感じでまた番外編作ってしまいました。

美妃はまだイギリスにいます。

翔太と雪姫はまだ籍は入れていませんが、甘ラヴな日々を過ごしています。

雪姫は翔太の事を「翔」と呼んでいます。

名前を覚えるのが苦手、というわけではない雪姫が唯一あだ名で呼ぶのが翔太です。

…では、本編へどうぞ♪

S u g a r s u g a r t i m e

それはまだ、雪姫と翔太が二年の頃。

生徒会としては、まだ玲生はいないものの、それでもかなりの人気をばくしていた。

翔太にとって、雪姫と両想いにやっとなれた幸せな時。

……そいつは、フラフラ〜と現れやがった。

♪
♪
♪

カチカチカチカチカチ。ガチツ。

面白くない。

カチカチカチカチカチカチ。

ほんつとうに面白くない。

翔太は出来るだけ明るく雪姫を振り返った。

「お昼ご飯食べよ？」

ソファで楓と楽しそうに談笑していた雪姫は翔太に頷いて微笑んだ。

……きゅん。

もうこの微笑みが見れるだけで俺が生きている理由になるというのに。

なに？そいつ。

まあしかも、雪姫の隣で弁当まで広げやがって。

間に割って入るうにも、あまりに楽しそうに話してるから、俺は雪姫の隣に行ってそいつを睨むのに精一杯だった。

雪姫は今やつと気が付いたという様に俺にそいつを紹介した。

「あ、翔？こちら木崎楓君。今日転校してきたの」

「よろしく願いますッスー」

俺は出来るだけ自然に微笑んだ。

「だれ？」

来客なんて聞いてない。

「だから木崎楓君だってば」

「うん、名前は分かったから。なんでここにいるの」

雪姫は苛々オーラ全開の俺を不思議そうに見詰め、普通に口を開いた。

「私が預かる事になったのよ？友達に頼まれて」

「……はい？え、ちょっと待って。預かる？なんで？いや何のために？」

「本当にご迷惑をおかけして心ぐるしいんですけど…」

「いま雪姫と話してんだよ」

雪姫は弁当のオカズを口に運びながら眉をひそめた。

「翔、なんか変よ？仲良くして」

「けど…」

「とにかく、楓君はうち（生徒会）でしばらく預かるから。部員にはしないけど雑用をやってもらうつもり」

雪姫に微笑みかけられ真っ赤になった楓は大きな返事をした。

「俺、頑張るッス！」

「……………」

無意識に俺は楓を睨んでいたらしい。
雪姫が疲れたようなため息をついた。

「もう。楓君のこと翔に頼もうと思ってたのに。いいわ、棗に頼むから」

「なんなんだあいつ……」

棗は不憫な眼差しで翔太を見た。

「お前、一人っ子やからなあ……。先住猫みたい」

「……あいつ、あの後も雪姫と楽しそうに学校見物して散歩行きやがった。アドレスまで交換してたし」

「散歩、付いていけへんかったん？」

「仕事があつたんだよ……」

あの笑顔で「頑張つてね」って言われると……。

従うしか無いじゃん？

ふうん、と軽く相づちをうつた棗はポン、と手を打った。

「そうや俺、雪姫さんに買い物頼まれててん。お前のせいで楓君も頼まれるし。仕事いっぱい。じゃ、ちょお行ってくるわ」

「……………」

はあー。

我ながら嫉妬とか……。

ガキかって。

でもさ。好きなんだし、俺だけを見て欲しいのは当然なんじゃないのかねー…。

うとうとと屋上で微睡んだ俺の鼻を、なにか柔らかいものがくすぐった。

「しょーお」

目を開けた俺に、雪姫の怒った顔が飛び込んできた。結んでいない長い髪が一筋、風で俺の顔にかかる。

笑ってその髪を片手で押さえながら、俺の隣にしゃがみこんだ雪姫は少し不機嫌な顔で俺の顔になにかを付けた。

ひんやりとした雪姫の手に、俺は瞬いた。

「なに？」

「化粧水。少し日焼けしてるわ。赤くなってるわよ？」

雪姫は、こんなところで寝るなんて何考えてんのかしら、と眉間にしわを寄せながら俺の頬をペシッと軽く叩いた。

「終了」

「…サンキユ。……雪姫」

「なによ？」

「キスしていい？」

は？と目を見開いた雪姫に唇を押し当てる。

「……………め、閉じて」

「っ……………」

やっとのことで唇を離れた俺を、雪姫は真っ赤な顔で軽く睨んだ。

「……………ここ、学校よ？」

変なところで真面目なんだから。

「いいじゃん。生徒会長だし俺」

「意味わかんない……………」

また、雪姫に唇を近づけた瞬間。

屋上のドアが勢いよく開いた。

「翔太さんいますかー？……………って、あ、雪姫さんも」

「……………翔」

驚いて離れようとする雪姫を抱き締めた俺に、楓は呆然と後ろにいた棗を振り返った。

棗は頭をかいている。

「翔太探してたら雪姫さんもいたとはなあ……」

おろおろしている楓に、俺はニツコリ微笑んだ。

「よ。雪姫は俺のかの」

「あー!!」

楓は俺たちを指差し満面の笑みを浮かべた。

「付き合ってらっしゃるんスね! いやー、羨ましいなあ」

「……………は?」

ちよいつと俺を見上げた雪姫は意地悪そうに笑った。

「楓君には可愛いフィアンセがいるのよ」紫紅ちゃんっていうんだけど、その娘から頼まれたの。変な虫が付かないように、預かって下さいって」

「な、なんだよそれ…」

俺は雪姫にもたれかかった。
なんか胸がほわっと一気に軽くなる。

「うふふ、嫉妬してくれた?」

「……………してないし」

「してたわよ」

「してたやん」

雪姫と棗のからかうような口調に思わず唇が尖る。

「してないしっ」

ただ一人、楓だけは何の事を言っているのか分からないようで、首を傾げていた。

帰り道。

ふたりで並んで歩きながら、雪姫は少しうつむいた。

「……………ごめんね？」

「え？なんで？」

すいっと俺の目を見詰めた雪姫の薄い茶の瞳に吸い込まれそうになる。

「……………させないでね？」

「え……………」

「今日、私が翔の立場だったら、楓君の首絞めてと思ったの。私は今日、翔に嫉妬されて嬉しかったけど、翔はしないよね？」

……………「うう、可愛いこと言っ」。

「しないです」

「約束ね？」

「あ。雪姫もすんなよ」

雪姫は楽しそうに微笑んだ。

「りょーかい♪」

夕暮れで、俺と雪姫の影が伸びる。

茶色い髪を指に絡めながら、俺は、普通に、この幸せな時間がいつまでも続く事を、信じていたんだ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1496/>

シュガー・プリンス

2010年10月10日18時41分発行